

福井県埋蔵文化財調査報告 第110集

中 角 遺 跡 3

— II・III区上層編 —

— 九頭竜川等河川改修事業に伴う調査 —

2 0 1 0

福井県教育庁埋蔵文化財調査センター

序 文

本書は、平成7年度から16年度にかけて実施した、九頭竜川等河川改修事業に伴う、中角遺跡発掘調査の成果のうち、調査Ⅱ・Ⅲ区の上層調査成果をまとめたものです。

中角遺跡は、福井市中角町を中心とした九頭竜川北岸一帯に所在し、奈良・平安時代および中世（上層）と、弥生・古墳時代（下層）の2つの遺構面を持つ遺跡です。この地域では古くから土器などの遺物が採集され、特に同町字多知地籍は、中世城館である「中角館」の跡地とされるなど、その存在は以前から広く知られています。

本書で報告する成果として注目されるのが、堀による大規模な土地区画です。堀による区画は先年報告したⅠ区上層調査でも検出されていますが、Ⅱ区では比較的狭い範囲で多くの堀が縦横に切り巡らされているために、区画がより細分化され、複雑な様相を呈しています。しかも、これらは時期の異なる2つの区画が重複していると推測され、当地で大掛かりな区画の整理や拡張がおこなわれたことを示しています。その一方で、そういった土地区画が全くおこなわれない地区や、畑の畝跡と見られる遺構が広範囲にわたって検出される地区もあるなど、かつての集落の構造や土地利用のあり方を考える上で、非常に興味深い成果が得られたと言えるでしょう。

今後、本書をはじめとする今回の調査成果が広く公開・活用され、埋蔵文化財に対するご理解と、郷土の歴史に関する興味をより一層深める端緒としていただければ、誠に幸いです。

最後になりましたが、発掘調査から報告書刊行に至るまで、関係諸機関をはじめ、地元の方々など多くの皆様方から、あたたかいご支援とご協力を賜りましたこと、心より感謝申し上げます。

平成22年3月

福井県教育庁埋蔵文化財調査センター
所 長 吉 岡 泰 英

例 言

- 1 本書は、福井県教育庁埋蔵文化財調査センター（以下、県埋文）が国土交通省九頭竜川等河川改修事業に伴い、国土交通省近畿地方整備局福井河川国道事務所の依頼を受けて、平成7年度から16年度にかけて実施した中角遺跡（福井県福井市中角町宇地・新畑か所在）の発掘調査報告書のうち、Ⅱ・Ⅲ区上層遺構調査成果をまとめた、「中角遺跡3 -Ⅱ・Ⅲ区上層編-」である。
- 2 調査は平成8年7月15日から平成16年8月26日まで実施し、主査 工藤俊樹（平成8年度）、同 月輪泰（平成9年度）、文化財調査員 中森敏晴（平成7～16年度、14年度から主査）、同 白川綾（平成10～15年度）、同 野路昌嗣（平成16年度）が担当した（役職はいずれも担当時、以下同様）。遺物整理作業は平成9年4月1日から平成22年3月31日まで、県埋文および中角遺跡現場事務所整理棟（平成15年9月30日まで）にて実施した。
- 3 本書の編集は主任 中森があたり、同 富山正明、主査 田中勝之、嘱託職員 水谷圭吾と分担して執筆した。執筆の分担は以下のとおりである。なお、第5章第4節1については、嘱託職員 山口充の教示を得た。
中森 第1～4章、第5章第3節・第4節1、第6章 富山 第5章第1節 田中 第5章第2節
水谷 第5章第4節2
- 4 中角遺跡に関するこれまでの成果の発表のうち、本書と齟齬がある場合には、本書をもって訂正したものと了解されたい。
- 5 遺構全体図は、株式会社バスコ（平成8～10年度）と中央測量設計株式会社（平成12～15年度）に委託して作成したものを一部改変して使用した。上空からの写真は各航空測量時に撮影したものである。
- 6 第1～3章の押図は主査 野路と水谷が主に作成した。遺構デジタル図化および押図作成は株式会社アーキジオに、土器デジタル図化はアイシン精機株式会社文化財プロジェクトにそれぞれ委託した。土器押図は嘱託職員 中村嘉之が、石製品押図は田中が、漆器押図は嘱託職員 西端博紀が、鉄製品押図は主任 鈴木篤英と山口が、銭貨押図は水谷がそれぞれ作成した。漆器の保存処理・樹種同定・塗膜構造観察は株式会社吉田生物研究所に、鉄鋼の復元および保存処理は(株)ニッテツ・ファイン・プロダクツ釜石文化財保存処理センターにそれぞれ委託した。
- 7 検出遺構の写真は工藤、月輪、中森、白川が撮影し、写真図版は中森が作成した。出土遺物の写真および写真図版は、土器を鈴木と中村が、石製品を田中が、漆器・金属製品を中森がそれぞれ撮影・作成した。
- 8 遺物実測図と写真図版などの遺物番号は符合する。写真の縮尺は不同である。
- 9 本書における水平レベルの表示は海拔高(m)を示し、方位は磁北を用いた。また、X・Y座標値は、国土方眼座標系第VI系（日本測地系）に基づく。
- 10 本書中の押図のうち、第1・4・5図は国土地理院2万5千分1地形図「越前森田」（平成12年6月1日発行）を、第6図は『福井県の中・近世城館跡』（福井県教育委員会 編 1987）133頁掲載図「7-24.中角館」を、それぞれ一部改変して作成した。
- 11 本書に掲載した遺物と調査に際して作成した図面・写真は、一括して県埋文に保管してある。
- 12 発掘調査に際しては、次の方々のご協力を得た（順不同、敬称略）。
中野拓郎（敦賀市教育委員会） 森由佳 岡田幸
- 13 発掘調査ならびに本書の作成にあたり、次の方々よりご指導・ご教示を頂いた（順不同、敬称略）。
小野正敏（国立歴史民俗博物館） 水野和雄・岩田隆（以上、福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館）
- 14 発掘調査には、地元の方々の参加・協力を得た。また、遺物整理作業は、県埋文の整理作業員があつた。

目 次

第1章 調査の経緯

第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査の経過	2

第2章 遺跡の地理的・歴史的環境

第1節 地理的環境	7
第2節 歴史的環境	8

第3章 遺跡の概要

第1節 II区の概要	13
第2節 III区の概要	16

第4章 遺構

第1節 平成8～10年度調査区	25
第2節 平成12・13年度調査区	51
第3節 平成14～16年度調査区	69

第5章 遺物

第1節 土器	75
第2節 石製品	111
第3節 漆器	115
第4節 金属製品	117

第6章 まとめ

第1節 各調査区のとまとめ	119
第2節 中世のI・II区の様相	122
第3節 館の成立とその背景	123

写真図版目次

図版第1	遺跡 (1) 遺跡遠景 (2) 遺跡遠景	図版第21	遺物 土器
図版第2	遺跡 (1) II区-①全景 (2) II区-②全景 (3) II区-③全景	(1) 堀2中層出土土師質皿	
図版第3	遺跡 (1) II区-③全景 (2) II区-④全景	(2) 堀2中層出土陶磁器	
図版第4	遺跡 (1) II区-⑤全景 (2) III区全景	(3) 堀2中層出土陶磁器	
図版第5	遺構 (平成8～10年度) 上:建物1～3 中:建物4 下:建物6	(4) 堀2上層出土土師質皿	
図版第6	遺構 (平成8～10年度) (1) 堀1～3 (2) 堀2～8	図版第22	遺物 土器 堀2上層出土土師質皿
図版第7	遺構 (平成8～10年度) (1) 堀9 (2) 堀10-11	図版第23	遺物 土器
図版第8	遺構 (平成8～10年度) (1) 井戸1～3・12 (2) 井戸6・8	(1) 堀2上層出土土師質皿	
図版第9	遺構 (平成8～10年度) (1) 井戸9・11 (2) 井戸10 (3) 井戸19	(2) 堀2上層出土陶磁器・瓦質火鉢	
図版第10	遺構 (平成8～10年度) (1) 井戸13 (2) 井戸14 (3) 井戸16	図版第24	遺物 土器 堀4出土土師質皿
図版第11	遺構 (平成12・13年度) (1) 井戸21 (2) 井戸21井戸枠 (3) 井戸24上面 (4) 井戸24上面木枠 (5) 井戸24曲物 (6) 井戸25	図版第25	遺物 土器
図版第12	遺構 (平成12・13年度) (1) 溝39 (2) 溝40・41 (3) 土坑101 (4) 土坑119	(1) 堀4出土土器 (2) 堀3出土土師質皿	
図版第13	遺構 (平成14～16年度) (1) 堀14 (2) 堀14断面・石段状遺構	(3) 堀5出土土器 (4) 堀8出土土器	
図版第14	遺構 (平成14～16年度) (1) 畝状遺構 (2) 畝状遺構	(5) 堀9出土土器 (6) 堀10出土土師質皿	
図版第15	遺物 土器 堀1出土土器	図版第26	遺物 土器 井戸16出土土師質皿
図版第16	遺物 土器 堀2下層出土土師質皿	図版第27	遺物 土器 井戸16出土土師質皿
図版第17	遺物 土器 堀2下層出土土師質皿	図版第28	遺物 土器 (1) 井戸16出土土師質皿 (2) その他の井戸出土土器
図版第18	遺物 土器 (1) 堀2下層出土土師質皿 (2) 堀2下層出土陶磁器 (3) 堀2中層出土土師質皿	図版第29	遺物 土器
図版第19	遺物 土器 堀2中層出土土師質皿	(1) 溝18出土土師質皿	
図版第20	遺物 土器 堀2中層出土土師質皿	(2) p194出土土師質皿	
		(3) 溝112出土須恵器蓋	
		(4) 土坑101出土須恵器蓋	
		(5) 溝29出土土師質皿	
		(6) 溝162出土須恵器杯	
		(7) その他の遺構出土陶磁器	
		図版第30	遺物 土器
		(1) 包含層出土土師器・黒色土器	
		(2) 包含層出土須恵器	
		図版第31	遺物 土器 包含層出土須恵器
		図版第32	遺物 土器 包含層出土土師質皿
		図版第33	遺物 土器
		包含層出土土師質皿・陶磁器・瓦質銅	
		図版第34	遺物 石製品
		図版第35	遺物 漆器
		図版第36	遺物 金属製品
		(1) 鉄製品 (2) 銭貨	

挿 図 目 次

第1図	中角遺跡位置図・試掘実施箇所図	1	第34図	井戸19実測図	50
第2図	調査Ⅱ・Ⅲ区区分図	3	第35図	建物12～14実測図	52
第3図	作業風景	6	第36図	建物15・16実測図	53
第4図	中角遺跡周辺地形図	7	第37図	井戸21実測図	55
第5図	中角遺跡周辺の中世遺跡分布図	9	第38図	井戸22・23実測図	56
第6図	中角館跡略測図	10	第39図	井戸24実測図	57
第7図	調査Ⅱ区土層柱状模式図	14	第40図	井戸25実測図	58
第8図	調査Ⅱ・Ⅲ区上層遺構全体図	17・18	第41図	井戸26実測図	59
第9図	調査Ⅲ区上層遺構図	19	第42図	溝39～41断面実測図	60
第10図	調査Ⅱ区上層遺構図		第43図	堀13・溝41断面実測図	61
	(1) 平成8～10年度	20	第44図	土坑62・63実測図	63
第11図	調査Ⅱ区上層遺構図		第45図	土坑64実測図	64
	(2) 平成12・13年度	21・22	第46図	土坑101実測図	65
第12図	調査Ⅱ区上層遺構図		第47図	土坑110・111実測図	66
	(3) 平成14～16年度	23・24	第48図	土坑119実測図	67
第13図	建物1・2実測図	26	第49図	土坑120実測図	68
第14図	建物3・4実測図	27	第50図	堀14・石段状遺構実測図	70
第15図	建物5・6実測図	28	第51図	欽状遺構実測図	71
第16図	建物7・8実測図	29	第52図	土坑126実測図	72
第17図	建物9・10実測図	30	第53図	土坑130～132実測図	73
第18図	建物11実測図	31	第54図	土坑133・134実測図	74
第19図	堀1・2断面実測図	33	第55図	中世土師質皿分類図	75
第20図	堀4断面実測図	34	第56図	堀1出土土器実測図	77
第21図	堀5～7断面実測図	35	第57図	堀2下層出土土師質皿実測図	78
第22図	堀3・7・8断面実測図	36	第58図	堀2下層出土陶磁器実測図	79
第23図	堀8・9断面実測図	37	第59図	堀2中層出土土師質皿実測図	80
第24図	堀10・11断面実測図	38	第60図	堀2中層出土陶磁器実測図	81
第25図	堀2・7・9断面実測図	39	第61図	堀2上層出土土師質皿実測図	82
第26図	堀2～5断面実測図	40	第62図	堀2上層出土陶磁器・瓦質火鉢実測図	83
第27図	井戸2・12実測図	43	第63図	堀4出土土器実測図	84
第28図	井戸3実測図	44	第64図	堀3・5・7～10出土土器実測図	85
第29図	井戸6・8実測図	45	第65図	井戸16出土土器実測図	87
第30図	井戸9・11実測図	46	第66図	井戸1・2・4・6～10・ 13・15・25出土土器実測図	88
第31図	井戸10実測図	47	第67図	その他の遺構出土土器実測図	89
第32図	井戸13実測図	48	第68図	包含層出土土師器・黒色土器実測図	91
第33図	井戸14・16実測図	49			

第69図	包含層出土須恵器・灰釉陶器実測図	92	第76図	石製品実測図(1)	112
第70図	包含層出土須恵器実測図	93	第77図	石製品実測図(2)	113
第71図	包含層出土土師質皿・陶磁器実測図	94	第78図	漆器実測図	116
第72図	包含層出土瓦質鍋実測図	96	第79図	鉄製品実測図	117
第73図	包含層土鍾	96	第80図	銭貨拓本図	118
第74図	土師質皿組成グラフ	97			
第75図	土師質皿編年図	98	付 図	中角遺跡 上層遺構全体図	

表 目 次

第1表	掘立柱建物一覧表(1)	31	第8表	土坑一覧表(2)	73
第2表	堀一覧表(1)	41	第9表	出土土器観察表	99
第3表	井戸一覧表(1)	50	第10表	石製品組成表	111
第4表	掘立柱建物一覧表(2)	51	第11表	石製品観察表	114
第5表	井戸一覧表(2)	54	第12表	漆器観察表	115
第6表	溝・堀一覧表	62	第13表	I 区上層出土銭貨観察表	118
第7表	土坑一覧表(1)	62	第14表	II 区上層出土銭貨観察表	118

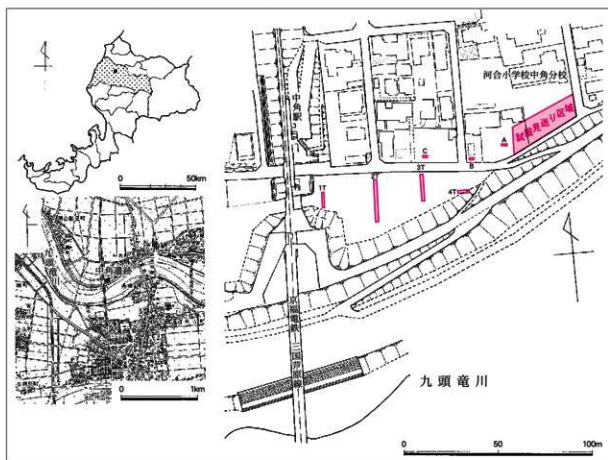
第1章 調査の経緯

第1節 調査に至る経緯（第1図）

福井県最大の河川である九頭竜川は、福井平野のほぼ中央、福井市北部を西へ流れ、支流の日野川を合わせて北西へ向かい、坂井市三国町で日本海に注ぐ。その福井市から三国町までを結ぶ京福電鉄（現えちぜん鉄道）三国芦原線の九頭竜川橋梁付近は、川が曲流している上、川幅が極端に狭くなっており、九頭竜川治水事業における最大の難所とされていた。

建設省近畿地方建設局福井工事事務所（現国土交通省近畿地方整備局福井河川国道事務所。以下、福井工事事務所）は、九頭竜川等河川改修事業の一環として、洪水時における九頭竜川および日野川の水位低下を図るとともに、福井市街地の河川水位を低下させ、治水安全度を向上させるために、九頭竜川の河道拡幅を実施する引堤工事を計画した。河道拡幅は京福電鉄九頭竜川橋梁改築（昭和57～63年度に実施）ともあわせて、北岸側に約2.016haの用地を取得した上で、延長約640mにわたって、堤防を堤内地側に引いて新築することとなった。

一方、事業予定地となった福井市中角町^{なかのつどろ}一帯では、土器などの遺物の散布が古くから知られ、特に宇多知地蔵は中世城館「中角館」の跡地に比定されるなど、遺跡の存在はすでに周知されていた。以上のような経緯を経て、平成4年（1992）8月26日、福井工事事務所は事業予定地の一部について、埋蔵文化財試掘調査を福井県教育庁埋蔵文化財調査センター（以下、県埋文）に依頼、同年8月31日から9月1日にかけて、試掘調査が実施された（第1図）。



第1図 中角遺跡位置図（上：縮尺1/2,500,000、下：縮尺1/50,000）・試掘実施箇所図（縮尺1/20,000）

調査の結果、第1～4トレンチとCグリッドでは、現地表下50～100cmに存在する茶褐色土層（上層）と、100～150cmに存在する黒褐色土層（下層）を確認した。これら2層は上層が中世（南北朝期）遺物を、下層が弥生・古墳時代遺物をそれぞれ包含し、遺構も遺物同様、層位を異にして検出された。

また、A・Bグリッドでは、現地表下40～80cmに後世の埋め戻しと見られる玉石の堆積を、その下層80～110cmに中世および弥生・古墳時代の遺物が混在する黒褐色土層をそれぞれ確認した。玉石の埋め戻し層は、かつて周辺が低湿地であった事実を示すとともに、当地が中角館跡比定地の外縁部にも近いことから、館の環濠跡に相当する可能性も想定された。

結論として、本遺跡は2時期の異なる層位を有する複合遺跡であり、その範囲は事業区域全域におよび、遺存状況はきわめて良好、出土遺物も多量という、非常に濃密な内容であることが判明した。

以上の調査結果に基づき、工事実施前には記録保存のための本格的調査が必要となる旨を福井工事事務所に回答したが、この時点ではただちに調査対応について具体的な協議はされなかった。ただ、すでに事業は開始されて久しく、さらに事業には堤防上を走る市道の改修、具体的には三国芦原線の踏切を廃して、市道を線路の高架下に通す立体交差化事業も含まれていたため、事業進捗を求める地元の声は日々高まりつつあった。平成6年（1994）に入り、福井工事事務所は調査対応を正式に要請、福井県教育庁文化課、県埋文との三者で協議の結果、九頭竜川等河川改修事業の一環として当時実施中であった、菅谷島帽子遺跡発掘調査を平成6年度末で一旦中止し、平成7年度より中角遺跡・中角館跡発掘調査へ調査体制を振り替えることで合意に達した。

なお、工事計画区域の一部が、中角館跡比定地にきわめて近接していたため、本発掘調査事業における遺跡名は「中角遺跡・中角館跡」とされた。しかし、結果として、館本体もしくはそれに関連すると断定し得る遺構や遺物は検出されなかったため、本書での遺跡名は「中角遺跡」のみとした。

第2節 調査の経過（図版第1～4、第2・3図）

1 全体の経過

中角遺跡発掘調査は、平成7年（1995）5月23日より開始し、平成16年（2004）12月8日に終了した。調査区の総延べ面積は21,148㎡（10,574㎡×上下2面）を測る。

調査区は京福電鉄三国芦原線を挟んで、上流側（東方）の調査区をⅠ区、下流側（西方）の調査区をⅡ区とし、Ⅱ区のさらに下流側の送電線鉄塔移設予定地をⅢ区とした。

調査Ⅰ～Ⅲ区の各延べ面積と調査期間は以下のとおりである。

Ⅰ区 5,380㎡（2,690㎡×上下2面）：平成7年5月23日～平成11年3月12日

Ⅱ区 15,480㎡（7,740㎡×上下2面）：平成8年7月15日～平成16年11月26日

Ⅲ区 288㎡（144㎡×上下2面）：平成16年8月18日～12月8日

当初はⅠ区調査完了後にⅡ区調査へ移行する予定であったが、Ⅰ区には住宅地・市道・学校敷地などが含まれ、それらの立ち退き完了時期が区割ごとに異なっていたため、断続的な調査対応を余儀なくされた。一方、Ⅱ区はその大半がすでに立ち退き済みの工場跡地で、即時かつ連続的な調査が可能であったことから、事業全体として進捗を図るために、Ⅰ区で時期を待ちながら各調査をおこないつつ、Ⅱ区でも併行して調査に着手することにした。

その後、平成11年（1999）には、鳴鹿大堰建設に関わる東古市地区暫定盛土工事に伴う、東古市縄手遺跡発掘調査に対応するため、同年6月23日から11月1日まで調査を一時中断した。また、平成16

年（2004）に着手したⅢ区は非常に小規模であったため、Ⅱ区と併行して調査を進めた。

以上、途中4ヶ月弱の中断を挟んだものの、本調査は開始から終了まで9年5ヶ月にわたる長期かつ大規模なものとなった。その成果も膨大であるため、調査報告書の構成はⅠ区とⅡ・Ⅲ区の調査区別で二分し、各々を上・下層でさらに二分する、計4分冊構成とした。

報告書の刊行順と内容は以下のとおりである。

1. 中角遺跡1 - Ⅰ区上層編 - (Ⅰ区上層調査成果：平成19年度既刊)
2. 中角遺跡2 - Ⅰ区下層編 - (Ⅰ区下層調査成果：平成20年度既刊)
3. 中角遺跡3 - Ⅱ・Ⅲ区上層編 - (Ⅱ・Ⅲ区上層調査成果)
4. 中角遺跡4 - Ⅱ・Ⅲ区下層編 - (Ⅱ・Ⅲ区下層調査成果)

本書は『中角遺跡3 - Ⅱ・Ⅲ区上層編』であり、Ⅱ・Ⅲ区上層調査成果をまとめたものである。

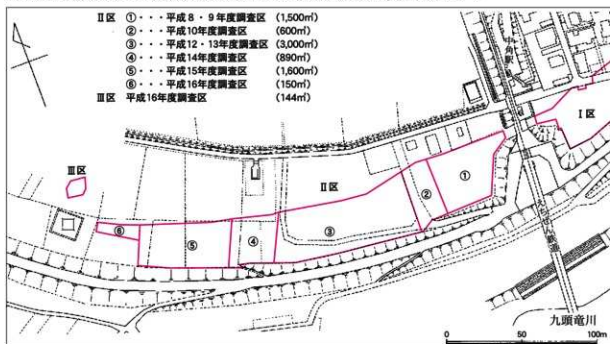
2 Ⅱ・Ⅲ区上層調査の経過

Ⅱ区の区割とⅢ区の各面積および上層調査期間は以下のとおりである（第2図）。

- Ⅱ区 ①1,500㎡：平成8年7月15日～平成9年12月9日
 ②600㎡：平成10年4月1日～9月4日
 ③3,000㎡：平成12年7月27日～平成13年7月30日
 ④890㎡：平成14年11月19日～平成15年4月16日
 ⑤1,600㎡：平成15年4月17日～10月20日
 ⑥150㎡：平成16年6月24日～8月12日

Ⅲ区 144㎡：平成16年7月14日～8月26日

グリッド割りは一辺を5mとし、南北にアルファベット（Y～Z、A～O、S～V）、東西にアラビア数字（36～93）を付してグリッド名とした。なお、事業予定地はⅡ区・⑥の南西側をはじめ、西側（下流側）にも相当の面積を残していたが、過去の試掘調査・現地調査の実績や周辺地形などを勘案した結果、調査を要するほどの埋蔵文化財は遺存せず、以後の調査は不要と判断した^①。



第2図 調査Ⅱ・Ⅲ区区分図 (縮尺1/25,000)

以下、Ⅱ・Ⅲ区上層調査の調査日誌を抄録する。

Ⅱ区（平成8～16年度）

① 平成8・9年度

平成8年

- 7月15日 調査開始。
Z～G86～93区(1,000m)包含層掘削開始。
- 7月26日 遺構精査開始。
- 8月2日 堀1・2 検出。
- 8月22日 堀2から片口（漆器）出土。
- 8月26日 堀3 検出。
- 9月19日 井戸1～4 検出。
- 9月24日 井戸5 検出。
- 9月26日 井戸6～8 検出。
- 9月27日 井戸9・10 検出。
- 10月4日 井戸11 検出。
- 10月15日 方形土坑（井戸13） 検出。
- 11月26日 Z～F83～85区（500 m）拡張、
包含層掘削開始。
- 12月17日 清掃。冬期休止に入る。

平成9年

- 2月20日 調査再開。測量杭打ち。
- 2月25日 Z～F83～85区遺構精査開始。
堀4・5 検出。
- 3月11日 堀5に先行する堀6 検出。
- 3月14日 堀7・井戸14 検出。

平成9年

- 3月19日 堀8 検出。
- 3月26日 井戸1・2の間に井戸12 検出。
- 4月9日 Z～G86～93区遺構再精査・見直し開始。
- 5月13日 福井工事事務所とⅠ・Ⅱ区調査計画について協議。Ⅱ区の空中測量を2度に分ける。
- 6月19日 堀3から包丁出土。
- 6月26日 井戸16から土師質皿多数出土。
- 7月31日 井戸19 検出。
- 8月7日 遺物取り上げ開始。
- 8月12日 清掃。
- 8月13日 Z～G86～93区空中測量。
全景・個別写真撮影。
- 9月5日 建物1～6 写真撮影。
- 10月6日 堀4・7・8下層などを残し、調査一時中断。
Ⅰ区調査へ集中。
- 11月27日 調査再開。
- 12月1日 遺構完掘。
- 12月4日 清掃。
- 12月5日 Z～F83～85区空中測量。
全景・個別写真撮影。
- 12月9日 堀の内側に土留の木枠と土のうを充填。
調査終了。

② 平成10年度

平成10年

- 4月1日 調査開始。
- 4月17日 包含層掘削開始。
- 4月21日 遺構精査開始。堀9 検出。
- 4月22日 堀10・11 検出。
- 5月22日 Z81・82区焼骨などが多く混じる
灰の分布を広範囲に確認。
- 5月27日 Z80区から鉄鍋出土。

平成10年

- 6月8日 堀9・10が一連の堀と判明。
- 7月7日 堀12 検出。
- 8月21日 堀12完掘。
- 9月1日 堀11完掘。
- 9月2日 堀10完掘。
- 9月3日 清掃。
- 9月4日 空中測量。全景・個別写真撮影。
調査終了。

③ 平成12・13年度

平成12年

7月27日 調査開始。包含層掘削開始。
 9月21日 遺構精査開始。
 9月28日 Z～B76～78区、大溝検出。
 10月4日 A・B72・73区、溝40・41検出。
 10月31日 C77区大溝検出。
 11月6日 C76区大溝検出。
 11月16日 C72・73区溝40・41検出。
 11月22日 D・E区大溝検出。
 12月6日 冬期休止に入る。

平成13年

3月1日 調査再開。
 3月5日 井戸22検出。
 3月15日 井戸22完掘。
 3月19日 溝40・41完掘。
 3月26日 Z・A73・74区溝39検出。
 4月13日 Z・A74・75区溝39検出。
 5月7日 A～C74・75区溝39検出。
 7月10日 溝39完掘。
 7月27日 空中測量。全景・個別写真撮影。調査終了。

④ 平成14年度

平成14年

11月19日 調査開始。包含層掘削開始。
 12月20日 冬期休止に入る。

平成15年

3月5日 調査再開。
 3月12日 遺構精査開始。
 3月19日 堀14検出。

平成15年

3月25日 堀14に付属すると見られる石段状遺構検出。
 4月4日 石段状遺構写真撮影。
 4月10日 堀14完掘。
 4月16日 空中測量。全景・個別写真撮影。
 調査終了。

⑤ 平成15年度

平成15年

4月17日 調査開始。包含層掘削開始。
 4月28日 前年度調査の石段状遺構、石取り上げ。
 5月6日 トレンチ調査により、調査区南西部が
 大きく下降していることが判明。
 6月3日 河合小学校3年生児童遺跡見学。
 8月7日 堀14検出（北壁のみ）。

平成15年

9月8日 遺構精査開始。
 9月10日 E～I45～56区の溝列、畝状遺構（烟跡）
 と判明。
 9月18日 遺構再精査・見直し開始。
 10月16日 空中測量。全景写真撮影。
 10月20日 個別写真撮影。調査終了。

⑥ 平成16年度

平成16年

6月24日 調査開始。重機で表土掘削。
 6月28日 包含層掘削開始。
 7月14日 遺構精査・完掘。平板測量完了。
 西端部に南北トレンチを入れる。
 7月20日 福井豪雨発生。県埋文本部施設被災に伴う
 復旧作業のため調査中断（～25日）。

平成16年

7月26日 調査再開。水汲み・清掃（～29日）。
 8月2日 ④・⑤下層調査に集中（～8月6日）。
 8月10日 南北トレンチ遺構精査。小ビット2～3基
 検出、調査不要と判断。
 8月12日 全景写真撮影。調査終了。

Ⅲ区（平成16年度）

平成16年

- 7月14日 調査開始。表土掘削開始。
7月20日 福井豪雨発生。県埋文本部施設被災に伴う
復旧作業のため調査中断（～25日）。
8月4日 調査再開。表土掘削。

平成16年

- 8月18日 測量杭打ち、表土・包含層掘削。
8月25日 遺構精査・完掘。平板測量完了。
8月26日 全景写真撮影。調査終了。

註

1. 調査不要と結論付けた根拠は、事業予定地の自然地形が九頭竜川に向かって急激に下降する斜面になっており、遺構がほとんど分布していないこと、包含層の莫大な土量に反して、遺物の含まれる割合が非常に少ないこと、などが挙げられる。なお、調査区の自然地形については、第3章でも詳述しているので、あわせて参照されたい。

参考文献

九頭竜川流域誌編集委員会 編 2000『九頭竜川流域誌 水との闘い そして共生』九頭竜川水系治水百周年記念事業実行委員会



第3図 作業風景

上左：包含層掘削（Ⅱ区-①）

中右：包含層掘削（Ⅱ区-④）

上右：遺構掘削（Ⅱ区-①）

下左：遺構精査（Ⅱ区-⑤）

中左：包含層掘削（Ⅱ区-②）

下右：表土掘削（Ⅲ区）

第2章 遺跡の地理的・歴史的環境

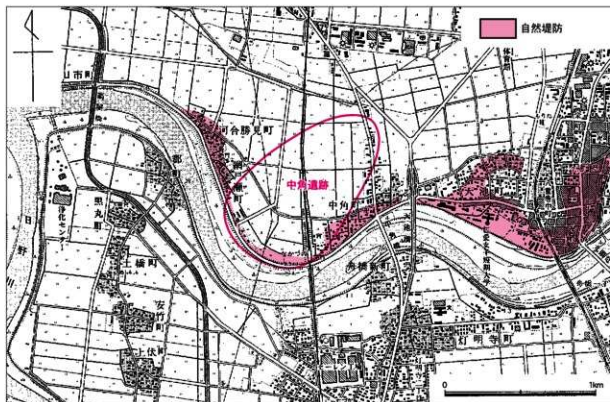
第1節 地理的環境〔第4図〕

福井県は昔の国名で言う越前と若狭の両国から構成され、本州日本海沿岸のほぼ中央近く、本州が西から次第に北東へ折れ曲がるあたりに位置する。現在では敦賀市の東方、木ノ芽山嶺を境に、以北を嶺北、以南を嶺南と呼び、行政的にも大別される。嶺北地方は古代の越前国にほぼ相当し、嶺南地方は古代の若狭国に旧越前国の敦賀市までを含む。

嶺北地方に広大な水系を形成する九頭竜川と、その支流の中でも特に長大な日野川・足羽川による相乗的な沖積作用で形成されたのが福井平野である。この平野をほぼ東西に横断する九頭竜川を境に、北部地域は特に坂井平野とも呼ばれ、その坂井平野の南端部、九頭竜川と日野川の合流域付近の九頭竜川北岸一帯には、かつて禁裏御領（皇室の荘園）として開発・経営された河合庄¹⁾が存在したとされる。この「河合」の名は現在でも地区名として地元で強く根付いており、中角遺跡の所在する福井市中角町はその河合地区の南端部に位置している。

中角は九頭竜川の渡し（渡船場）の一つとして古くから有名で、交通の要衝であった。また、九頭竜川と日野川との合流点にも近く、江戸時代には「米河戸」とも呼ばれ、年貢米の積み出しがおこなわれるなど、近代に入って陸運手段が急速に発達するまでは、陸路と水路の両利を得た通運拠点として活用されていた。

地形を見ると、現在の中角集落は主に九頭竜川北岸に展開する広大な自然堤防（第4図朱網掛部）上に立地している。中角遺跡の推定総面積は70㎡あまりにおよぶ（同図朱線枠内²⁾）が、やはりその中心は中角集落周辺の自然堤防上に展開していたものと推測される。



第4図 中角遺跡周辺地形図（縮尺1/25,000）

第2節 歴史的環境 [第5・6図]

1 中角遺跡と周辺の中世遺跡

本項では中角遺跡の周辺域、特に九頭竜川北部地域の主要な中世遺跡調査事例について記述する。

法土寺遺跡（第5図4） 福井市江上町字法土寺・字漆谷に所在する。字名や地元に残る伝承から、寺院跡の可能性が従来から指摘されていた。国道416号改良工事に伴い、平成6年度から11年度にかけて県埋文が調査を実施、弥生時代の墳丘墓や古墳時代の群集墳、中世の寺院跡などを検出した。

中世寺院は14世紀前後の創建と見られ、15世紀から16世紀にかけて、地形の改変を伴う大規模な造成を経て、堀切や土塁を備えた城館的性格の強い寺院へと変貌を遂げたが、最後には火災に遭って廃絶した、という盛衰の過程が推測されている。

漆谷遺跡（第5図5） 福井市江上町字漆谷に所在する。国道416号改良工事に伴い、平成5年度に県埋文が調査を実施、古墳時代前期および6世紀中頃から7世紀前半の古墳群と、13世紀後半から14世紀後半以降の中・近世墓群を検出した。

石盛遺跡（第5図9） 福井市石盛町に所在する。同町館ノ中・館ノ前地籍は中世城館「石丸城」の跡地に比定される。森田北東部土地区画整理事業に伴い、平成14・15・18・19年度の4箇年度にわたって、福井市文化財保護センターが館ノ中・館ノ前地籍などで発掘調査を実施、堀を伴う室町時代の館跡や掘立柱建物・区画溝・井戸などを確認した。詳細は次項で記述する。

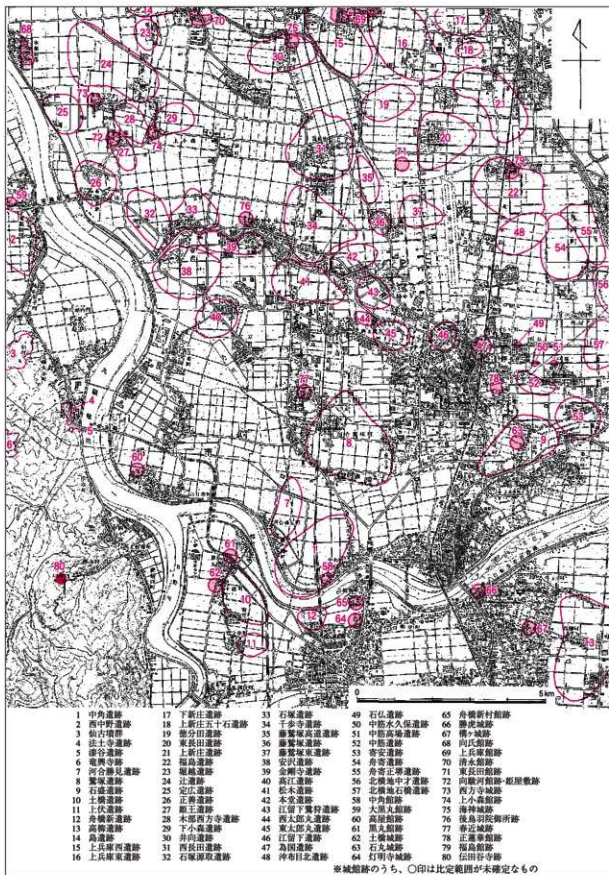
上兵庫西遺跡・上兵庫東遺跡（第5図15・16） いずれも坂井市坂井町上兵庫に所在する。県営担い手育成基盤整備事業に伴い、平成8年度から12年度にかけて県埋文が発掘調査を実施、中世（鎌倉・室町時代）の遺構として、掘立柱建物や多数の井戸などが検出されている。

西太郎丸遺跡（第5図44） 坂井市春江町西太郎丸に所在する。公共施設（ハートピア春江）建設事業に伴い、平成5年度に旧春江町教育委員会が県埋文の指導を受けて発掘調査を実施、古墳時代、奈良・平安時代、中世（鎌倉・南北朝時代）までの期間に、断続的に営まれたと思われる集落跡を確認した。特に中世集落跡は遺構密度が高く、大規模な集落であった様子がうかがえる。

東太郎丸遺跡（第5図45） 坂井市春江町東太郎丸に所在する。福井県児童科学館建設事業に伴い、平成7年度に県埋文が発掘調査を実施、古墳時代から近世に至る集落跡を確認した。中世以降の集落は13世紀から18世紀にかけて存続し、その最盛期は15世紀から16世紀後半までと見られる。

江留下遺跡（境元町地区）（第5図46） 坂井市春江町境元に所在する。住宅地地盤特定治水施設等整備事業と町道敷設事業に伴い、平成6年度に県埋文が調査を実施、古墳時代前期および奈良～室町時代にかけての集落跡を確認した。中世集落については、遺物の内容から15世紀後半から16世紀初頭までが集落の最盛期と見られる。当地周辺は中世荘園榎富庄に比定されていることから、これらの荘園を支えていた集落の一つであった可能性が高い。

伝田谷寺跡（第5図80） 福井市田ノ谷町に所在する。平成18年（2006）4月12日、同町大安寺境内斜面土中より、大量の銅銭が詰まった大甕が不時発見された。翌日より福井市文化財保護センターが緊急調査を実施、その結果、隅丸方形の土坑に掘えられた越前焼の大甕（漆による接合痕あり）の中に、緋銭（紐で通した銅銭）約11万5千枚と、その上に置かれた木札1枚を確認した。特に、木札には「明應九年（1500）庚申七月吉日」の記載があり、銅銭の埋納時期を特定できる貴重な成果と言える。また、修理されているとは言え、大甕の使用年代の明確な一点が示されているところから、越前焼編年の基準資料としても重要である。



第5図 中角道跡周辺の中世道跡分布図 (縮尺1/50,000)

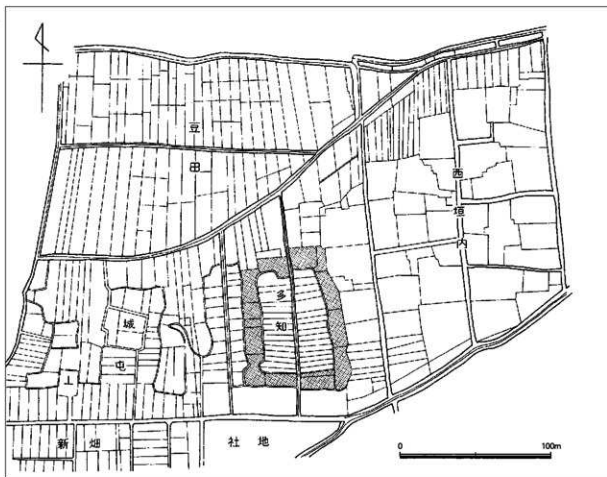
2 中角館跡と周辺の中世城館跡

本項では中角遺跡と非常に関連の深い中角館跡と、周辺地域の主要な中世城館跡について記述する。

中角館跡（第5図58、第6図） 福井市中角町字多知に所在する。『越前国名蹟考』^{（以下、『名蹟考』）}には、朝倉氏の家臣乙部勘解由左衛門の居館として、「中角村藤申西方畑之中四十間二十間計之所堀形有」と記される。明治初年の地籍図では、多知地籍内の畑地（南北72m、東西36m）を囲んで、水田が約9m幅で巡っているように見受けられるため、『名蹟考』にある中角館とその環濠跡と目されている（第8図）。現況は住宅地や水田などで、館の遺構などが確認されたとの記録はない。

館の主である乙部勘解由左衛門の名は、貞治三年（1364）十月二十七日付乙部勘解由左衛門宛沙弥某遵行状案（『八坂神社文書』）に初出する。当時は室町幕府管領家斯波氏の家臣で、越中国の守護使であった。下って、『守光公記』永正十六年（1519）二月二十二日条広橋守光宛半井明重書状の追筆に、河合庄の給人^{（一）}として「乙部右京亮」の名が見えるが、その頃には勢力が著しく衰えていたようである^{（二）}。

その後、『朝倉始末記』によると、朝倉氏滅亡直後の天正二年（1574）、乙部氏は一向一揆軍に攻められ、館を追われたという。『名蹟考』には、吉田郡藤巻村（現、吉田郡永平寺町藤巻）字勘解由殿にある藤巻館^{（三）}の主として、「朝倉家 南部勘解由左衛門義綱 乙部トモ」と記されているところから、乙部氏は中角館を追われて藤巻に落ち延び、名を南部と改め、藤巻館に居住した、と解釈されてきた。ところが、近年発見された新資料『一乗録』に、こうした従来の解釈とは異なる記述^{（四）}のあることが判明したため、中角館と乙部氏の盛衰については今一度検討し直す時機にきていると言える。



第6図 中角館跡略測図（縮尺1/2,500）

黒丸城跡（第5図61） 福井市黒丸町字浜田北割に所在するとされる。大黒丸館（第5図59）と區別して小黒丸城とも呼ばれ、『名蹟考』には「黒丸村ヨリ一町計北方畑之内九尺計四方之城台其外田畑之内石垣所々有之」とある。九頭竜川と日野川に挟まれた平野の北西部に位置し、両川の合流点を間近に望む要害の地にある。南北朝期の争乱時には、北朝方斯波高経が本陣とした。南朝勢力掃討の後には、高経の家臣であった朝倉広景の居城となり、以後、朝倉氏が一乗谷に移るまでの本拠とされた。永正三年（1506）七月、加賀一向一揆軍が越前に侵攻してきた際には、朝倉方2千騎が陣所とし、中角に布陣した一揆軍と対峙、これを打ち破った。

現在は集落西方の水田中に碑が残るが、遺構らしきものは確認されていない。

石丸城跡（第5図63） 福井市石盛町字館ノ中・館ノ前に所在するとされる。石丸館・河合城とも呼ばれ、『名蹟考』には「石森村ヨリ四十間計長方畑之中二十間三十間計」とある。『太平記』によれば、建武四年（1337）に南朝方細屋右馬助が河合に城を構えたことあり、新田義貞の城として「河合ノ石丸ノ城」とも見え、南朝方にとっては非常に重要な戦略拠点であった。下って、延徳三年（1491）三月十日、冷泉為広が京から越後国へ下向する際、越前国の「イシマル」を通り、「城アリ」、「其日火事アリ」と、当時の石丸に城があったことを記している（『越後下向日記』）。戦国期には朝倉氏家臣佐伯勘解由左衛門の居城となるが、一向一揆によって焼亡した。

前項で記したように、平成14・15・18・19年度の4箇年度にわたって、福井市文化財保護センターが館ノ中・館ノ前地籍などで発掘調査を実施している。まず、館ノ中地籍では、字境に沿った南北2箇所に堀を、堀割の内部に掘立柱建物・区画溝・井戸などをそれぞれ検出した。南堀の規模は幅10m、深さ2.2mを測り、堀幅も含めた区画の規模は南北84mにおよぶ。また、館を造る際の盛土（約0.5m厚）による堀割内の整地の痕跡も確認した。一方、館の外側にあたる館ノ前地籍でも、掘立柱建物・区画溝・井戸・土坑などを検出した。特に区画溝は堀に平行または直交する方向に掘られ、間隔も南北方向で30～35m前後と規格性が認められた。この溝で区切られた区画ごとに掘立柱建物が建つことから、1区画が建物1棟分の敷地に相当するものと推定される。

灯明寺城跡（第5図64） 福井市灯明寺町に所在するとされる。『名蹟考』には2箇所記されており、まず一つは前述の黒丸城への対城として、新田義貞が一時的に設営したとされる城跡で、「灯明寺村端西方二十四間四方之内、搔上形有、当時氏神堂有」とあり、現在の白山神社境内がその跡地に比定される。もう一つはその城跡に隣接する勝木平右衛門の屋敷跡として、「灯明寺村端北西方畑中二間四方計之所当時人家有」とある。いずれも詳細は不明である。

勝虎城跡（第5図66） 福井市舟橋町に所在するとされる。名の由来は南北朝期に北朝方勝虎政澄が居城したためと言われ、黒龍城あるいは舟橋城とも呼ばれる。『名蹟考』には「舟橋村之内五十間二三十間計之屋敷」とある。北陸街道の渡河点に立地し、江戸期以降は舟橋奉行の屋敷とされた。明治36年（1903）の九頭竜川架橋工事の際には、石垣に使用したと思われる大石を掘り出している。

春近城跡（第5図77） 坂井市春江町針原平柳垣内字奥坪ノ内・前坪ノ内の一帯に所在するとされる。『太平記』にもその名が見え、『名蹟考』には南朝方脇屋義助の居城として、「春近郡針原村ヨリ半町計北畑之内二十間二三十間計之所有之」とある。城跡などの痕跡は確認されていない。

註

- 1 皇室および「和寺・嚴願寺三寶院莊園。成立は平安時代末期とされる。北は福井市川合繁郷町、南・西は九頭竜川、東は吉田郡永平寺町新原に接する広大な範囲を占めていたと推測される。九頭竜川北岸に展開していたので、当初は「河北庄」と呼ばれたが、応仁の乱以後に越前国の実権を掌握した朝倉氏が同字異音の在所とすり替え、年貢額を勝手に切り下げたため、朝廷は「河合庄」と名を改めた。朝廷はその後も年貢額の是正を再三督促したものの、ことごとく無視され、朝倉氏の滅亡とともに河合庄も事実上消滅した。この経緯については第6章で詳しく記す。
- 2 国中の中角道跡の範囲は「福井県道跡地図」(福井県教育委員会 編 1993)に基づく。なお、平成16年(2004)に筆者が本道跡の九頭竜川堤外地区で実施した試掘調査では、道物や遺構などは一切検出されず、道跡はもともと存在しなかったか、もしくは河川の侵食により消失したものと判断した。
- 3 荘園から給金を貰い、現地で荘園の管理を請け負っていた人物。
- 4 朝廷は緩急を付いた河合庄からの年貢の納入を図って、明重に朝倉氏との交渉にあたらせたが、明重が守光へ交渉の仔細を報告した書状の追記には、「彼給人乙部右京亮、一段無力者候、河合五郎兵衛、以他足進上申候云々(河合庄給人である乙部右京亮は困窮して財力がなく、河合五郎兵衛が他所で年貢を調達、納入した)」とある。
- 5 藤巻館跡については、中部縦貫自動車道建設事業に伴い、平成12～15年(2000～2003)にかけて県理工が発掘調査を実施しており、堀・土塀・掘立柱建物など16世紀代の館跡と見られる遺構を確認している。なお、下記の参考文献「角川日本地名大辞典 18 福井県」の藤巻館の項には、藤巻館がもとは乙部氏の館であったとの記載が見えるが、誤りである。
- 6 乙部氏が「河合の八杉」に攻められ、館を捨てて逃げ去り、八杉が代わってその館に入ったという主旨では、「朝倉始末記」・「一乗録」とも共通している。しかし、館の所在地について「朝倉始末記」には明記されていないが、「一乗録」では「吉田郡藤巻村」とされており、館＝中角館とする従来の解釈に矛盾する。また、「河合」についても「朝倉始末記」には郡を特定する記述がなく、中角周辺の河合庄城一帯と推測されていたが、「一乗録」には「大野郡河合郷」とある(河合庄はその全域が当時の吉田郡に属する)。この問題については第6章で詳しく検討する。

参考文献

- 小栗田淳 監修 1981 『福井県の地名』 日本歴史地名体系第18巻 平凡社
 河原純之・島田正彦・津田嘉彦・松浦義則 責任編集 1989 『角川日本地名大辞典 18 福井県』 角川書店
 国土地理院 2004 『1:25,000 土地条件図 福井』
 福井県教育委員会 編 1993 『福井県道跡地図』
 福井県教育委員会 編 1987 『福井県の中・近世城館跡』
 福井県 編 1994 『福井県史 通史編2 中世』
 福井市 編 1990 『福井市史 資料編1 考古』
 福井市 編 1997 『福井市史 通史編1 古代・中世』
 齊藤次兵衛 編 1969 『春江町史 春江町』
 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター 2008 『中角道跡1 - I 区上層編 -』 福井県埋蔵文化財調査報告第100集
 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター 2009 『中角道跡2 - I 区下層編 -』 福井県埋蔵文化財調査報告第105集
 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター 2007 『法土寺道跡1』 福井県埋蔵文化財調査報告第49集
 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター 2003 『法土寺道跡2』 福井県埋蔵文化財調査報告第63集
 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター 2008 『漆谷道跡』 福井県埋蔵文化財調査報告第31集
 福井市教育委員会 1997 『開発道跡・高柳道跡・石盛道跡』 道跡発掘事前総合調査Ⅱ
 福井市文化財保護センター 2004 『石盛道跡』 『第19回福井県発掘調査報告会資料』 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター 8頁
 大川進 2007 『石盛道跡』 『第22回福井県発掘調査報告会資料』 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター 30頁
 大川進 2008 『石盛道跡』 『第23回福井県発掘調査報告会資料』 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター 25頁
 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター 2004・2005 『坂井兵庫地区道跡群Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ』 福井県埋蔵文化財調査報告第73・81・82集
 中森敏晴 1994 『西太郎九遺跡』 『第9回福井県発掘調査報告会資料』 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター
 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター 2008 『江留下道跡(境元町地区)』 福井県埋蔵文化財調査報告第33集
 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター 2008 『東太郎九遺跡』 福井県埋蔵文化財調査報告第39集
 古川登 2007 『伝田谷寺跡』 『第22回福井県発掘調査報告会資料』 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター 31～33頁
 河村昭一 1978 『南北朝期における守護権力構造(一)・(二)・(三) - 斯波氏の被官構成 -』 『若郷郷土研究』 第23巻 2・3・4号 福井県郷土誌懇談会 19～28・52～77頁
 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター 2007 『藤巻館道跡』 福井県埋蔵文化財調査報告第95集
 河合村誌編纂委員会 編 1982 『河合村誌』
 佐藤圭 2002 『「一乗録」について』 『一乗谷朝倉氏遺跡資料館紀要2001』 福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館 1～17頁
 小栗田淳 1986 『冷泉為政卿の越後下向日記と越前の旅路』 『福井県史研究』 第3号 1～16頁

第3章 遺跡の概要

第1節 II区の概要 [図版第1～4-(1)、第2・7・8～12図]

1 地形

中角遺跡は九頭竜川北岸に展開する自然堤防地形の微高地上に立地する。調査II区の規模は、東西に最大276m、南北に最大36m、総面積は7,740㎡を測る。引堤事業であるために、調査区は川の弯曲に沿って長く延び、下流側(西側)ほど幅は徐々に狭くなる。周辺の現況は堤防および畑地で、区内の事業以前の状況は工場施設敷地および畑地であった(第2図)。

II区は調査期間ごとに6つの区割に分かれるが、遺構の内容や傾向などを総合的に判断すると、平成8～10年度調査区(II区-①・②)、平成12・13年度調査区(II区-③)、平成14～16年度調査区(II区-④・⑤・⑥)の3つにおおむね集約される。以後はこの区割に基づいて記述を進める。

上層遺構検出面^①の標高を順に見ていくと、平成8～10年度調査区は、東・西6.10～6.30m、南・北6.40～6.20mと起伏もあまりなく、ほぼ平坦な地形と見てよい。

平成12・13年度調査区の場合、各所に多少の起伏^②が見られるが、東半部と西半部とでは若干地形が異なる。まず、東半部では東・西6.60～6.40m、南・北6.40m前後と、おおむね西方(下流側)へ緩やかに下降するのみである。一方、西半部では東・西・南・北とも6.40m～5.80mと、西方への下降傾向がやや強くなるのに加え、南方(川側)への下降傾向も同様に見られる。

そして、平成14～16年度調査区になると、その傾向はより顕著に現われ、地形が北半の平坦面と南半の斜面とに大きく二分されていく。平坦面では東・西6.20～6.10m、南・北5.90～6.20mと、南方にやや下降気味な程度であるが、斜面では東・西6.00～4.10m、南・北4.10～5.90mと、南西方向に向かうほど一層傾斜が強くなり、南西隅では平坦面と比べて高低差が最大2m前後にまで落ち込んでいる。この傾斜地形は九頭竜川の自然堤防の周縁部に相当するものと推測され、本遺跡が自然堤防上に立地・展開している状況を初めて実地に確認する結果となった。

2 層序

標準層序は以下のように大別され、その基本的内容はI区と同様である。なお、表土層は近年の整地・造成などによる攪乱が著しく、自然堆積層としては評価しがたいので省略する。

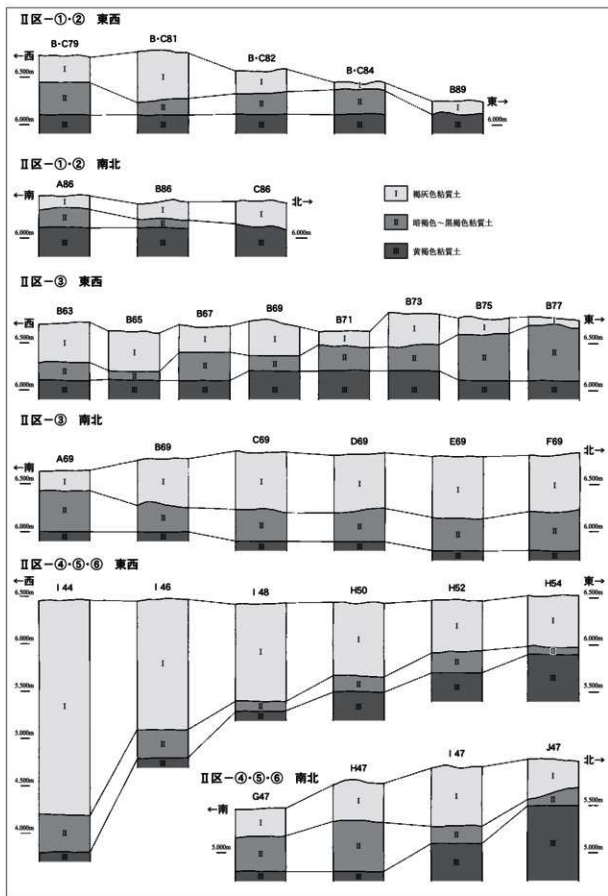
I層：褐灰色～茶褐色粘質土で構成される上層遺物包含層。土師器・須恵器、土師質皿・越前焼など、律令・中世遺物を主に含む。現地表下40～50cmにあり、堆積の厚さは30～50cmほどになる。

II層：暗褐色～黒褐色粘質土で構成される下層遺物包含層。弥生土器・土師器など、弥生・古墳時代遺物を主に含む。堆積の厚さは30～50cmほどになる。

III層：黄褐色～黄緑褐色粘質土で構成される地山層。深度の深いところや湧水の状況によっては還元色(青緑灰色～青灰色など)に変わる。

土質はI～III層とも共通し、粘性はやや弱く、砂質ぎみである。中でもIII層は下流側・川側ほど砂質の程度が強くなる傾向にあり、平成14～16年度調査区まで至るとほぼ砂質土に移行している。

堆積状況は基本的に前項で確認した地形同様である^③が、特に平成14～16年度調査区でI・II層の偏在が著しい(第7図)。南側斜面ではI層の堆積が最大2m以上にまで発達する一方、北側平坦部ではごく薄く、場合によってはI層直下でII層を欠き、III層上面がほとんど露出する箇所もあった。



第7図 調査Ⅱ区土層柱状模式図

3 遺構の分布状況

II区で検出した上層遺構は、掘立柱建物16棟、堀11条^⑩、井戸26基などである(第8・10～12図)^⑪。溝や土坑・ピットなどの遺構については、基本的に遺物が出土した遺構のみ番号を付した。遺構のほか、調査区内にかつて存在した工場施設跡や、その施設撤去に伴って廃材や瓦礫を埋め立てたゴミ穴などの攪乱も散見され、そのほとんどはⅢ層にまで達する深いものであった。

本来はI層中の何処かに上層生活面が存在していたものと推測されるが、I層の平面・断面いずれにおいても遺構等の視認が困難であったために、確実に視認可能なII層上面を遺構検出面と定めて上層遺構調査を実施した。

遺構の分布状況には、区割ごとに際立った特徴が認められる。上流側から順に見ていくと、まず平成8～10年度調査区(第10図)では、縦横に切り廻らされた堀割とそれによる大規模な土地区画が最大の特徴である。遺構密度も非常に高く、堀や掘立柱建物・井戸など、II区全体で検出された主要な遺構のうち8割あまりがこの調査区に集中している。

平成12・13年度調査区(第11図)に移ると状況は一変し、全般に遺構密度が散漫になる。特に堀や溝が少なく、上流側のように複雑な堀割は見られない。さらに平成14～16年度調査区(第12図)では、遺構密度にさほどの変化はないものの、調査区南側の斜面を中心として、南北方向の細長い溝が横並びに多数密集して検出されている。これらの溝の密集は畑の畝跡と推測され、溝として検出・掘削したのは、つまり畝と畝との間の凹み部分に相当するものと理解される。また、堀は調査区の南際に1条、それも部分的に検出しただけで、いわゆる堀割と言える状況は認められない。

4 遺物の出土状況

II区上層調査の出土遺物は、平成8年度で50箱(大コンテナ、以下同じ)、9年度で18箱、10年度で8箱、12年度で27箱、13年度で25箱、14年度で14箱、15年度で60箱、総量で202箱を得た^⑫。

これを調査区別に見直すと、平成8～10年度調査区で76箱、平成12・13年度調査区で52箱、平成14～16年度調査区で74箱となり、絶対量でも調査面積あたりの量でも、平成8～10年度調査区が最も多く、平成12・13年度調査区が最も少ない。中でも平成8～10年度調査区では、その出土量の9割方がII区-①に集中しており、著しい偏りが見て取れる。

出土遺物の内容はI区とほぼ同様に、律令期・中世の各時期に属するものが得られた^⑬。やはり、中世遺物が主体を占めるが、他の時期の遺物が少数であったI区とは違い、律令期遺物も相当量得られた。

中世遺物の所属時期幅は13世紀代から16世紀代まで、ほぼ中世の全期間におよぶが、主体となるのは14・15世紀代で、特に14世紀後半から15世紀前半が中核となる。内容は土師質皿(かわらけ)が大半で、これに越前焼や古瀬戸、青磁・白磁などの陶磁器が若干含まれる。土器以外では五輪塔などの石製品や漆器・金属製品など、I区では得られなかった遺物も若干含まれる。

律令期遺物の所属時期幅は7世紀代から9世紀代までで、内容は須恵器・土師器が主である。

また、遺物の構成内容についても、出土量と同様、調査区別に差異が見られる。平成8～10年度調査区ではほぼすべてを中世遺物が占める内容であるが、平成12・13年度調査区では律令期遺物が目立ち始め、全体として中世遺物の割合が減少する。そして、平成14～16年度調査区に至ると、完全に律令期遺物主体になり、中世遺物は少量となる^⑭。つまり、上流側は中世遺物主体で、下流側へ行くほど律令期遺物主体に移行していくという傾向が見て取れるのだが、それは各調査区の遺構の所属時期は無論のこと、前項で触れた遺構の構成内容にも関連しているものと推察される。

第2節 III区の概要 [図版第4-(2)、第2・8・9図]

1 地形と層序

調査III区の規模は、北東-南西方向に12m、北西-南東方向に11.8m、総面積は144㎡を測る。周辺の現況は畑地で、区内の事業以前の状況も同様であった(第2図)。

上層遺構検出面の標高は、東-西6.43～6.53m、南-北6.52～6.43mと、北東方向に向かって低くなっているが、比高差はさほどなく、ほぼ平坦な地形と言ってよい。

標準層序は以下のとおりである。基本属性は隣接するII区(平成14～16年度調査区)とほぼ共通するが、相違点もいくつか見られる。なお、表土層は耕作土である。

I層：褐灰色～茶褐色粘質土で構成される上層遺物包含層。中世遺物をわずかに含む。現地表下15～20cmにあり、堆積の厚さは30～40cmほどである。

II層：暗褐色～黒褐色粘質土で構成される下層遺物包含層。弥生土器・土師器など、弥生・古墳時代遺物を主に含む。堆積の厚さは50～60cmほどである。

III層：黄褐色～黄緑褐色砂質土で構成される地山層。

土質についてはII区と同様、I・II層は粘性が弱く砂質で、堆積状況も地形と同様に平坦である。一方、上記のように遺物包含量は大きく異なり、I層遺物はごくわずかで、II層遺物も少ない。

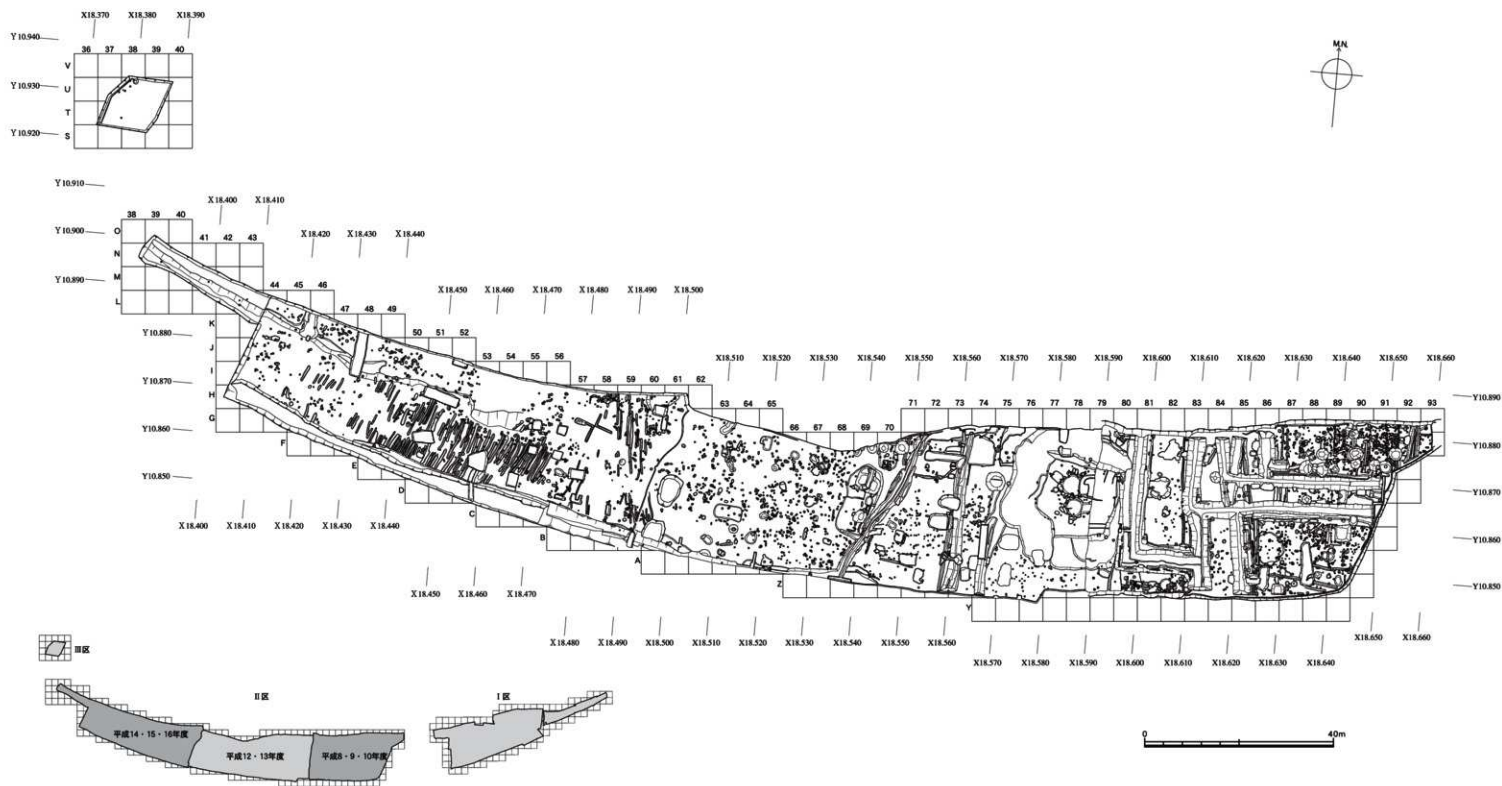
2 遺構と遺物

III区で検出した上層遺構は土坑1基とピット7基である(第8・9図)。分布状況は一見して散漫で、ピット1基を除くすべての遺構が調査区北西隅に偏っているが、調査区が狭小なことや、遺構数自体非常に少ないことを考慮すれば、何らかの傾向を積極的に見出せるものとは言いがたい。出土遺物も包含層遺物がごく少量得られたのみで、内容も細片が多く、これも積極的な評価はできない。

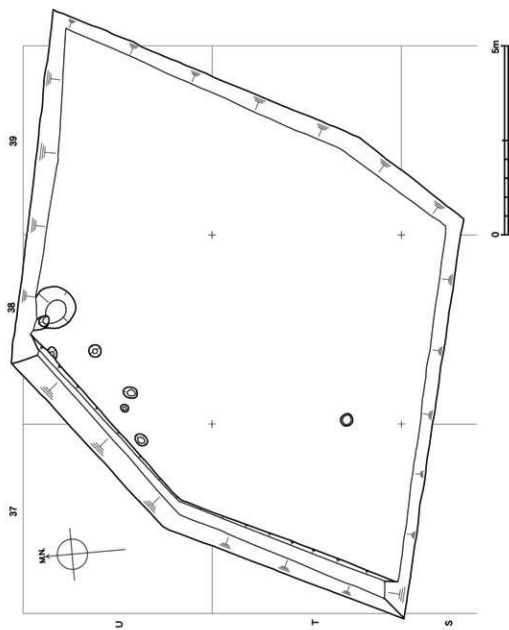
以上、III区上層調査は調査区が狭いこともあるが、非常にわずかな成果しか得られず、評価は難しい。よって、本節の記述をもって成果のすべてに代え、次章以降では特に記述しない。

注

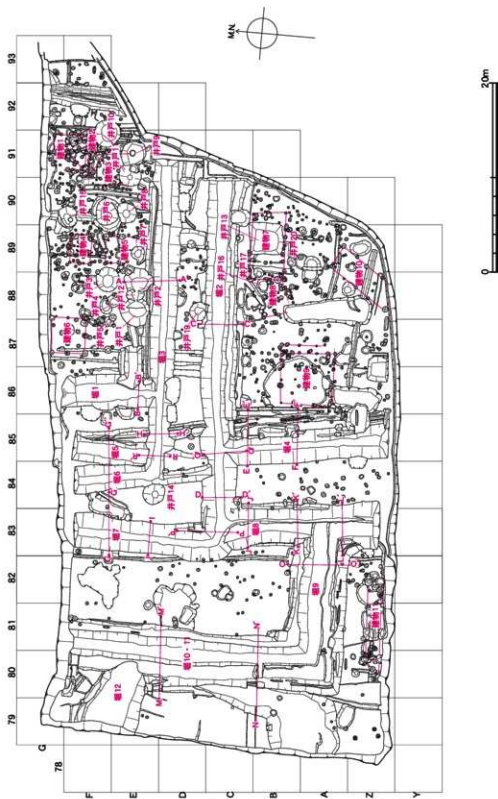
- 1 ここで言う遺構検出面は当時の生活面とは必ずしも一致しない。詳細は遺構の分布状況の項を参照されたい。
- 2 この地区では、上層調査時に下層遺構の痕跡(墳墓の周溝部)も一部検出されていることから、自然地形以外に下層遺構(墳墓群)による起伏も現出していた可能性もある。
- 3 平成8～10年度調査区(II区-①・②)の柱状図は、ほかの地区に比べて非常に断片的である。これは後述するように、大型の堀が多数検出され、通しセクションの各所に堀の覆土が掛かり、基本層序として参考にできる部分が少なかったためである。
- 4 堀の遺構番号は1～14まで付したが、調査後の検討の結果、堀10・11は事実上同一の堀、堀12は下層遺構の痕跡、堀13は溝の類とそれぞれ判断したため、最終的な総数は11条となった。詳細は次章を参照されたい。
- 5 本書中で提示する図は各区別の測量図を接合・編集したもので、各々の境界上に存在する遺構の表現には推定値も含まれる。
- 6 16年度調査区(II区-⑥)の出土遺物は非常にわずかであったため、法量から除外した。
- 7 このほかにも弥生式土器・土師器などの下層遺物が相当量得られているが、基本的に上層遺構との関連性はないと判断、すべて下層包含層遺物として扱い、同調査区の下層調査成果とあわせて整理・検討することとした。したがって、本書では下層遺物の内容について、特に言及はしない。
- 8 註7で記したように、出土遺物には下層遺物も相当量含まれているため、本文に記した各調査区での上層遺物の内容や構成の傾向と出土遺物量とは必ずしも合致しない。



第8図 調査Ⅱ・Ⅲ区上層遺構全体図 (縮尺1/800)



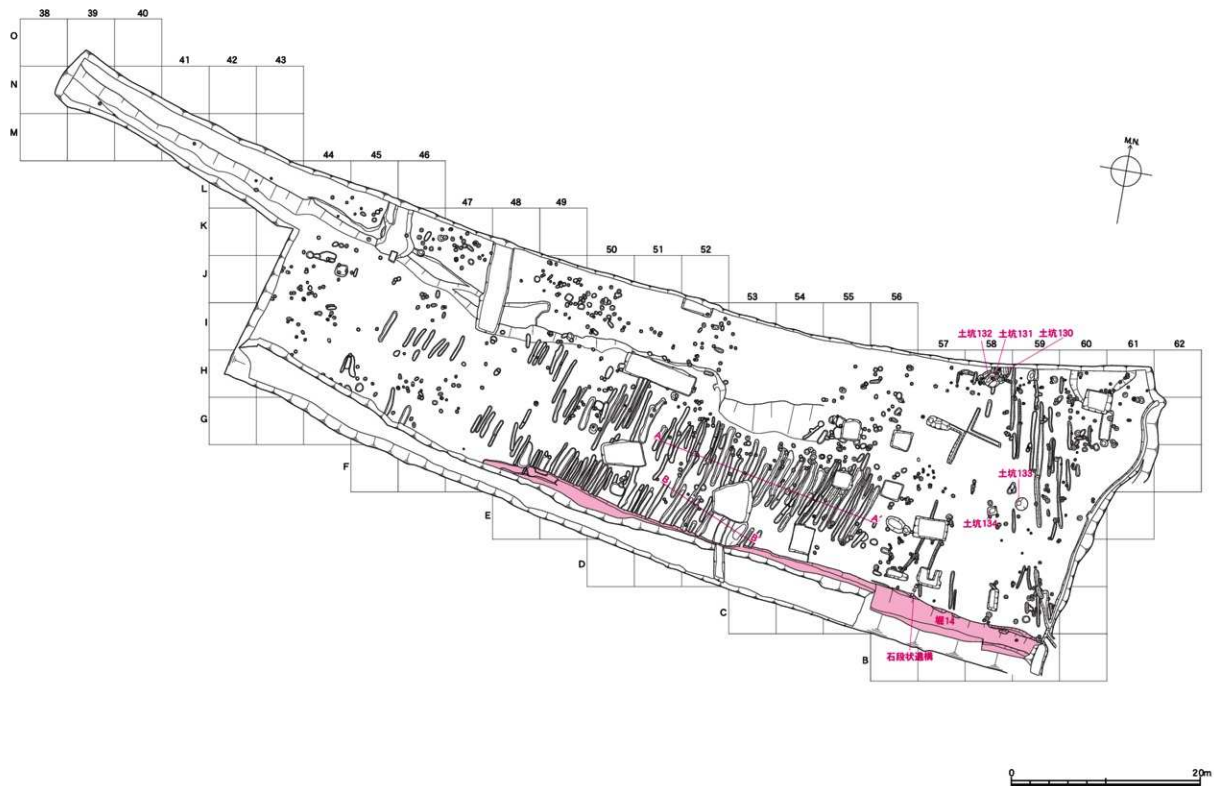
第9図 調査Ⅲ区上層遺構図 (縮尺1/100)



第10図 調査Ⅱ区上層遺構図(1) 平成8～10年度(縮尺1/400)



第11図 調査Ⅱ区上層遺構図(2) 平成12・13年度 (縮尺1/400)



第12図 調査Ⅱ区上層遺構図(3) 平成14～16年度 (縮尺1/400)

第4章 遺構

本章ではⅡ区上層調査で検出された主要な遺構を年度調査区別に記述する。各遺構の出土遺物については、第5章を参照されたい。なお、本章で提示する各遺構の規模（長さ・幅・深さなど）や方位（角度）についての数値は、すべて遺構検出面を基準として、測量図上で測定・算出した概数値である。

第1節 平成8～10年度調査区〔図版第5～10、第10・13～34図、第1～3表〕

本調査区で検出した上層遺構は、掘立柱建物11棟、堀10条、井戸20基、溝33条、土坑61基、ピット266基（溝・土坑・ピットは遺物を出土したもののみ）をそれぞれ数える。本節では掘立柱建物・堀・井戸のうち、代表的なものを抽出・記述する。

1 掘立柱建物

掘立柱建物11棟の内訳は総柱建物が8棟（建物1～3・5～9）、側柱建物が2棟（建物4・10）、不明が1棟（建物11）である。平面形状は略正方形ないし略長方形で、柱間は桁行・梁行とも1.6～2.0m前後のものが多いが、厳密な規格性などは特に見て取れない。柱穴は径30～50cmの不整形円のピットが主だが、中には一辺80cm以上の方形の掘り方を持つものも見られる。深さは10～20cm程度のものが最も多く、60cmを超えるものは稀である。建物の方位は、その大半が東西・南北にほぼ準拠しており、後述する土地区画を意識したものと見られる。

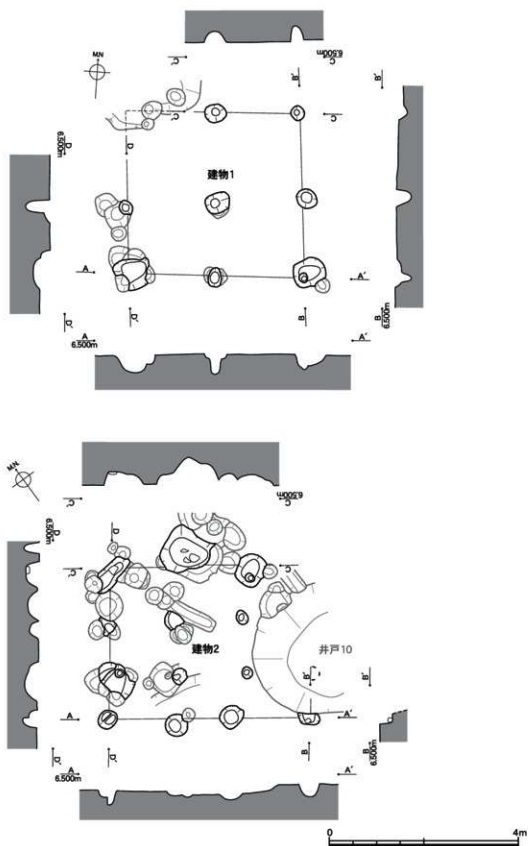
建物1～6・8はいずれも桁行・梁行が3.0～4.0m前後の、比較的小型の建物である。2×2間の建物が大半を占め、柱間もおおむね似通っているものが多い。一方、建物7・9～11はいずれも桁行が5.0mを超える、比較的大型の建物である。形態・構造はそれぞれに異なり、底状の張り出し部を有するものもある。以下、概要を記すが、個々の詳細は一覧表（第1表）を参照されたい。

建物1・2（第13図） 建物1は調査区北際に位置し、攪乱により北西隅の柱穴を欠く。総柱建物であることから、区外にさらに伸展する可能性も高い。建物2は井戸10覆土を掘り込む柱穴が確認された（第31図）ので、3×3間と判断したが、北東隅の空白地に柱穴が見当たらないので、3×2間である可能性も残る。柱数が多い反面、柱間が短いため、規模はさほど大きくない。建物1・3と重複し、いくつかの柱穴を共有するが、意図的か偶発的かは判断しがたく、先後関係も不明である。

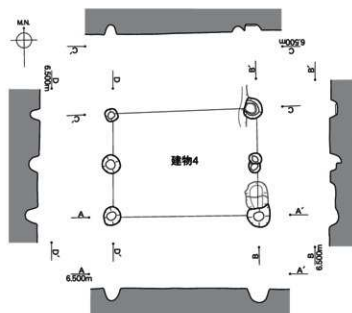
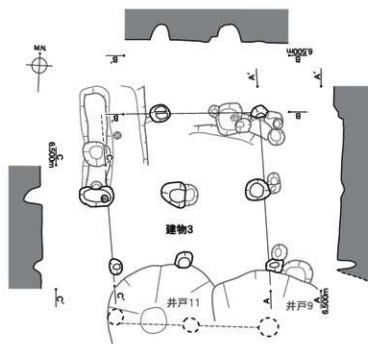
建物3・4（第14図） 建物3は井戸9・11覆土断面から柱穴の存在が推測されたので、3×2間と判断した。桁行方向の柱列が全体に西へ傾き、平面形が平行四辺形を呈する。建物4は梁行が桁行よりも長く、桁行の柱間も1.1m前後と、ほかに比べて特に短い。

建物5・6（第15図） 建物5は井戸7（第9図）により南西隅の柱穴を欠くものと推測されるが、井戸7との先後関係は不明である。建物6は総柱建物であるが、北梁行間の柱穴を欠く。

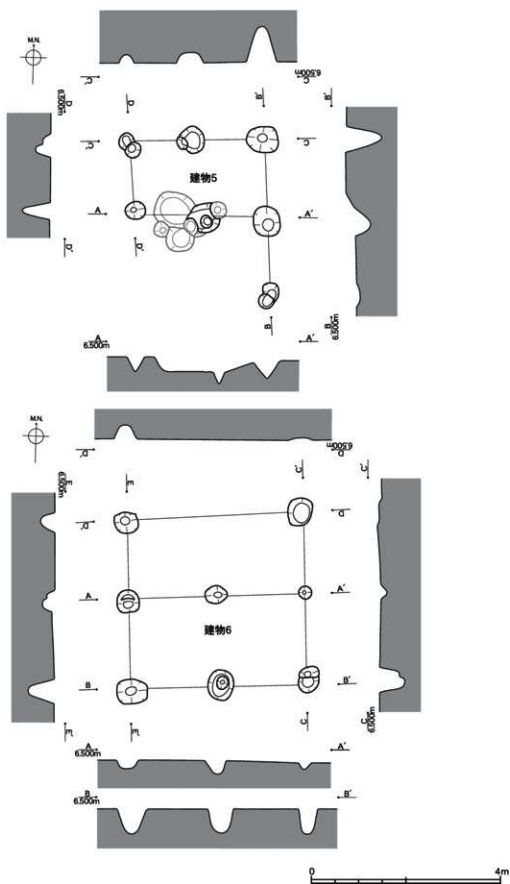
建物7・8（第16図） 建物7の柱間は桁行・梁行とも1.6～1.8m程度だが、桁行西側の2間分のみ1.0m程度と目立って短い。井戸13を覆うような位置にあるが、その井戸覆土断面（第32図）に柱穴の存在が確認できることから、建物7は井戸13に後行して建てられたものと推測される。建物8は建物7・井戸16とそれぞれ重複するが、前者とは柱穴同土切り合う箇所がないため、後者とは建物8が調査終了後に設定・確認されたため、いずれも先後関係は推量し得ない。



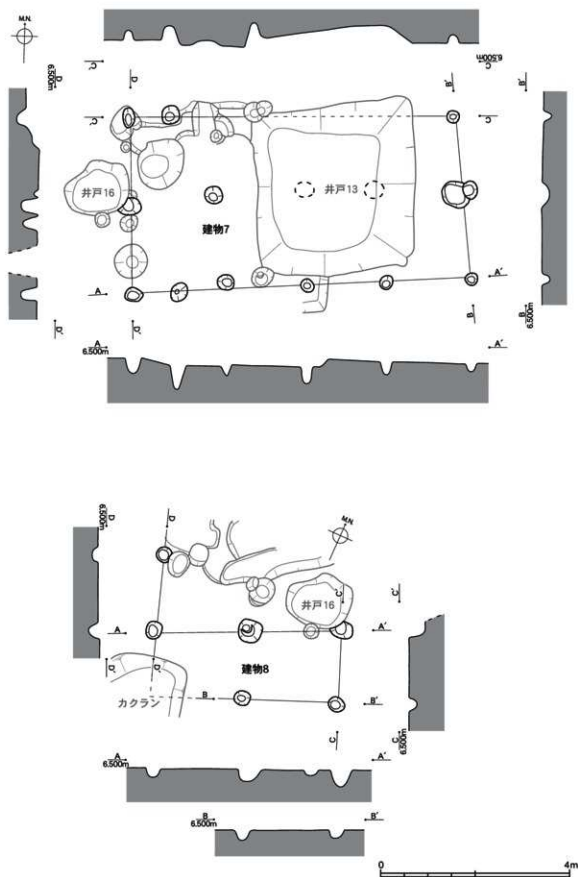
第13図 建物1・2実測図(縮尺1/80)



第14図 建物3・4実測図 (縮尺1/80)



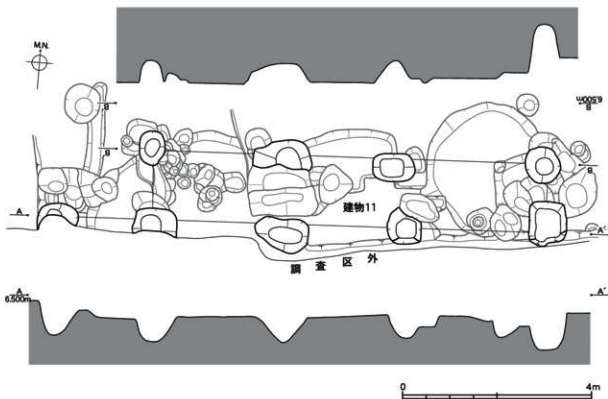
第15図 建物5・6実測図 (縮尺1/80)



第16図 建物7・8実測図 (縮尺1/80)

建物9・10(第17図) 建物9は3×3間の母屋の東側に、2×1間の底状の張り出し部を有する。なお、建物9に隅丸方形の大型竪穴(第9図)が重複しているが、これは下層遺構面の盛土の痕跡を上層遺構と誤認して掘削したもので、両者に関連性はない。建物10は4×1間建物だが、調査区南際での部分的検出であるため、調査区外では建物がさらに伸長している可能性もある。

建物11(第18図) 建物11は調査区南際で部分的に検出された。母屋の北側桁行4間とそれに付随する3×1間の底状の張り出し部と推測される。1辺80～100cm前後の四角い掘り方を持つ大型の柱穴が多く見られ、柱間も大半が2.0m以上と広く、中には3.0mを超える箇所もある。ほかの建物と比較して、形態・構造に明確な相違が見られるところから、建物の性格もしくは所属時期が異なる可能性が指摘できよう。



第18図 建物11実測図(縮尺1/80)

第1表 掘立柱建物一覧表(1)

遺構名	地区	桁×梁	構造	方位 (桁行方向)	桁行(m)	梁行(m)	出土遺物	備考	神図No.
建物1	F-G91	2×2	総柱	N5°W	3.7	3.5		建物2と重複	第13図
建物2	E-F91～92	3×3	総柱	N56°W	4.3	3.2		建物1・3と重複。礎石残す	第13図
建物3	E-F90～91	37×2	総柱	N7°W	(4.5)	3.3		建物2、井戸8・9と重複	第14図
建物4	F89	2×1	側柱	N1°E	2.2	3.0			第14図
建物5	E-F89	2×2	総柱	N4°W	3.3	2.8		井戸7と重複	第15図
建物6	F-G87～88	2×1(北梁) 2(南梁)	総柱	N3°W	3.6	3.7		北梁の柱穴が1基少ない	第15図
建物7	B-C88～90	5×2	総柱	N86°E	7.2	3.7		井戸13・17と重複	第16図
建物8	B88	27×2	総柱	N68°E	3.9	(3.0)		建物7、井戸16と重複	第16図
建物9	A-B86～87	3×3(母屋) 2×1(張り出し)	総柱	N4°W	5.5(母屋) 3.8(張り出し)	5.6(母屋) 1.0(張り出し)		北東部に底状の張り出し	第17図
建物10	Z-A88～89	47×1	側柱	N34°E	(7.4)	2.6			第18図
建物11	Z80～82	4×1(母屋) 3×1(張り出し)	不明	N88°E	10.4(母屋) 8.3(張り出し)	不明(母屋・残存) 1.5(張り出し)		北部に底状の張り出し	第18図

2 堀

当調査区で検出した堀1～12(第10図)のうち、堀10と堀11は実質同一の堀、堀12は下層遺構の痕跡(墳墓周溝部)とそれぞれ判明したため、堀の総数は10条となる。方位はいずれも東西・南北方向にほぼ準拠し、方位と方角を意識して堀割を構築した様子がうかがえる。覆土に有機物層や粘土層の堆積する例が多く、水堀(濠)と見られる。これらの堀割は、個々の堀の規模や、多数接続・分岐する複雑な構造から見て、土地区画や用・排水路だけでなく、小舟などによる移動を想定した水路網の整備も兼ねていたと推測される。以下、概要を記すが、個々の詳細は一覧表(第2表)を参照されたい。

堀1(第19図上) 堀3と丁字状につながるが、さらにその交差点手前の東壁で、土坑43とも丁字状につながる。ただし、土坑43の規模や形状が堀のそれに近いこと、覆土が堀1のそれと全く一様で、切り合い関係も見出せなかったことなどから、実質上は堀1の一部であったと見なすのが妥当であろう。覆土は比較的厚めの単層が平坦に堆積し、粘土層や有機物層はほとんど認められない。

堀2(第19図中・下) 堀4～8と各々つながる。本遺跡で特に遺物が集中的に出土した遺構である。覆土は基本的に薄い土層が幾重にも折り重なるレンズ状堆積を呈するが、上部では分厚い単層が、壁面近くでは大きな崩落の痕跡なども認められる。下層部は特に層が多く、多量の遺物を含む厚い粘土層も見られる。また、C86～90区までの南壁には幅0.5～0.7m、高さ1.0m前後の段差が付く。

堀3(第22図上) 堀1・5・6と各々つながる。覆土上半部の厚い層の堆積が北方(左方)に大きく傾くところから、南側より多量の土が投入された状況、つまり人為的に埋め立てられた状況が推測される。

堀4(第20図) 堀2と丁字状につながる。覆土は全体にレンズ状堆積を呈するが、上半部ではやや乱雑な部分(その2)も見られる。また、Z～C85・86区までの東壁に0.5～1.0mほどの段差(土坑34など含む)が付くなど、堀2との類似点も指摘できる。

堀5(第21図下) 堀3と十字状に交差する。覆土はごく上部で厚い単層が目立つが、中・下部では細かいレンズ状堆積が認められる。

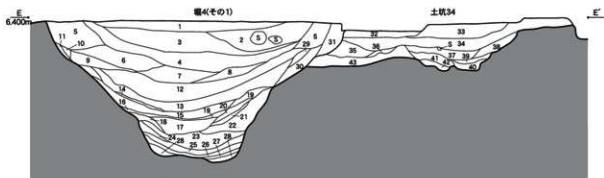
堀6(第21図下) 堀3とL字状につながる。覆土上・中部の堆積が東方(右方)に大きく傾くところから、西側より土が投入された状況、つまり人為的に埋め立てられた状況が推測される。

堀7(第21図上・22図中) 堀2とL字状につながる。堀2に比べ、幅はやや広く、深さは同等程度である。覆土は平坦なレンズ状堆積を呈する。

堀8(第22図下・23図) 堀2・9と丁字状につながる。底部東際には幅0.2～0.3m、深さ0.2m前後の細い溝が切られている。覆土は基本的にはレンズ状堆積を呈するが、全体に東方へ下降して偏り、所々不規則な堆積(第22図下)や、非常に不規則かつ細かい堆積(第23図上)、全体に平坦な堆積(同図下)など、同じ堀でも場所によって堆積状況が異なっている。なお、第23図下の断面図には底部東際の細溝は確認できないが、29・30・32層の堆積状況からその存在が推定できる。この場合、土質が地山層に近い31・33層は、底面の掘り過ぎである可能性が高くなる。

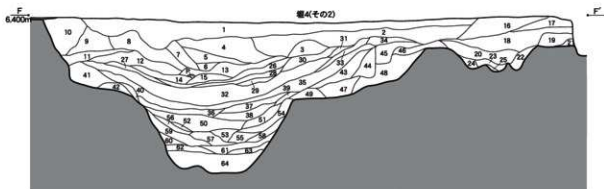
堀9(第25図上) 堀8と丁字状に、堀10・11とL字状にそれぞれつながる。幅・深さでは本遺跡でも最大級の部類に属する。覆土は平坦なレンズ状堆積を呈する。

堀10・11(第24図) 堀9とL字状につながる。幅・深さでは本遺跡で最大規模を有する堀である。覆土は平坦なレンズ状堆積を呈する。西壁に幅1.4～1.5m、高さ0.5～0.6m前後の幅広い段差を有するが、この段差が溝状に落ち込んでいた(断面図その2、46層上部など)ため、堀の拡張あるいは再掘削を想定し、当初の堀10に対して「堀11」を設定した。しかし、覆土からは両者を峻別し得ず、先行する堀



第4(その1)

- [illegible]

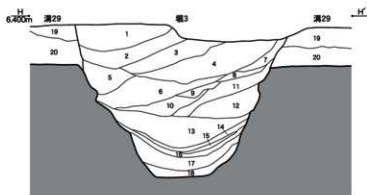


題名(その2)

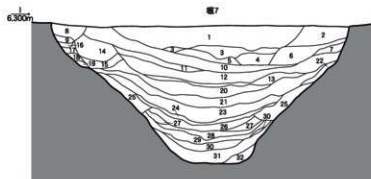
- [illegible]



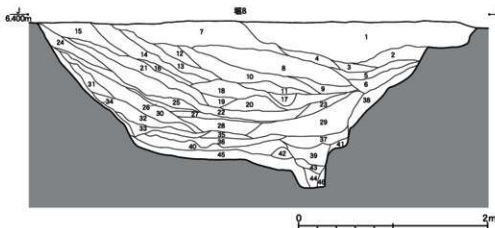
第20図 堀4断面実測図 (縮尺1/40)



- [illegible]

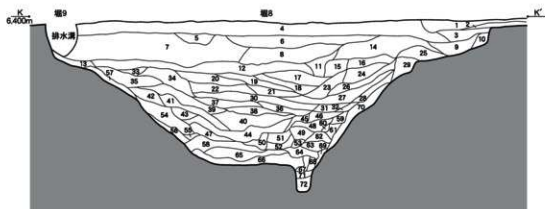


- [illegible]



- | | | | | | | |
|---------------------|--------|----------------|--------|---------------|--------|-----------|
| 1.黒色色鉛筆土 | 鉛筆土・黒鉛 | 17.緑黄色色鉛筆土 | 鉛筆土・緑鉛 | 33.透青色・暗青色シルト | 鉛筆土・緑鉛 | 長草・多量含む |
| 2.黒色色鉛筆土 | 鉛筆土・黒鉛 | 18.オリーブ・暗褐色粘質土 | 粘質土・黒鉛 | 34.透青色・暗青色シルト | 鉛筆土・緑鉛 | 長草・多量含む |
| 3.暗褐色色鉛筆土 | 鉛筆土・黒鉛 | 19.灰黄色粘質土 | 粘質土・黒鉛 | 35.灰黄色シルト | 鉛筆土・緑鉛 | |
| 4.暗褐色色鉛筆土 | 鉛筆土・黒鉛 | 20.灰黄色粘質土 | 粘質土・黒鉛 | 36.灰黄色粘質土 | 鉛筆土・緑鉛 | 重腐植体を含む |
| 5.黄褐色色鉛筆土 | 鉛筆土・黒鉛 | 21.灰黄色粘質土 | 粘質土・黒鉛 | 37.灰黄色粘質土 | 鉛筆土・緑鉛 | |
| 6.黄褐色色鉛筆土 | 鉛筆土・黒鉛 | 22.灰黄色粘質土 | 粘質土・黒鉛 | 38.灰黄色粘質土 | 鉛筆土・緑鉛 | |
| 7.オリーブ・暗褐色粘質土 | 粘質土・黒鉛 | 23.灰黄色色鉛筆土 | 粘質土・黒鉛 | 39.灰黄色粘質土 | 鉛筆土・緑鉛 | 腐植体・土片を含む |
| 8.黄褐色色鉛筆土 | 鉛筆土・黒鉛 | 24.灰黄色色鉛筆土 | 粘質土・黒鉛 | 40.灰黄色粘質土 | 鉛筆土・緑鉛 | 長草・多量含む |
| 9.灰黄色・暗褐色粘質土 | 粘質土・黒鉛 | 25.灰黄色色鉛筆土 | 粘質土・黒鉛 | 41.灰黄色粘質土 | 鉛筆土・緑鉛 | 腐植体・土片を含む |
| 10.オリーブ・暗褐色粘質土 | 粘質土・黒鉛 | 26.灰黄色粘質土 | 粘質土・黒鉛 | 42.灰黄色粘質土 | 鉛筆土・緑鉛 | |
| 11.黄褐色色鉛筆土 | 鉛筆土・黒鉛 | 27.灰黄色粘質土 | 粘質土・黒鉛 | 43.灰黄色粘質土 | 鉛筆土・緑鉛 | |
| 12.黄褐色色・オリーブ・暗褐色粘質土 | 粘質土・黒鉛 | 28.灰黄色粘質土 | 粘質土・黒鉛 | 44.灰黄色粘質土 | 鉛筆土・緑鉛 | |
| 13.暗褐色色鉛筆土 | 鉛筆土・黒鉛 | 29.灰黄色粘質土 | 粘質土・黒鉛 | 45.灰黄色粘質土 | 鉛筆土・緑鉛 | |
| 14.暗褐色色鉛筆土 | 鉛筆土・黒鉛 | 30.灰黄色粘質土 | 粘質土・黒鉛 | 46.灰黄色粘質土 | 鉛筆土・緑鉛 | |
| 15.オリーブ・暗褐色粘質土 | 粘質土・黒鉛 | 31.灰黄色粘質土 | 粘質土・黒鉛 | | | |
| 16.暗褐色色鉛筆土 | 鉛筆土・黒鉛 | 32.灰黄色粘質土 | 粘質土・黒鉛 | | | |

第22図 堀3・7・8断面実測図(縮尺1/40)

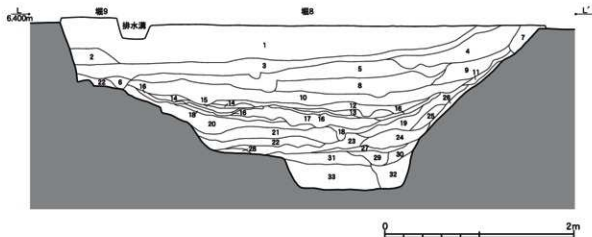


堀8・9 (その1)

1. 暗褐色粘質土 粘りやや強 しどろろ 炭若干含む
2. 暗褐色粘質土 粘りしどろろ 炭若干含む
3. 暗褐色粘質土 粘りしどろろ 炭少し、土層片含む
4. 暗褐色粘質土 粘りしどろろやや強 土層片含む
5. 暗褐色粘質土 粘りしどろろ 炭若干含む
6. 暗褐色粘質土 粘りしどろろ 炭少し、土層片含む
7. 暗褐色粘質土 粘りしどろろ 土層片含む
8. 暗褐色粘質土 粘りしどろろ
9. 暗褐色粘質土 粘りしどろろ
10. 暗褐色粘質土 粘りしどろろ
11. 暗褐色粘質土 粘りしどろろ
12. 暗褐色粘質土 粘りしどろろ
13. 暗褐色粘質土 粘りしどろろ
14. 暗褐色粘質土 粘りしどろろ
15. 暗褐色粘質土 粘りしどろろ
16. 暗褐色粘質土 粘りしどろろ
17. 暗褐色粘質土 粘りしどろろ
18. 暗褐色粘質土 粘りしどろろ
19. 暗褐色粘質土 粘りしどろろ
20. 暗褐色粘質土 粘りしどろろ
21. 暗褐色粘質土 粘りしどろろ
22. 暗褐色粘質土 粘りしどろろ
23. リーフ状砂質土 粘りしどろろ
24. 暗褐色粘質土 粘りしどろろ

25. 暗褐色粘質土 粘りしどろろ
26. 暗褐色粘質土 粘りしどろろ
27. 暗褐色粘質土 粘りしどろろ
28. 暗褐色粘質土 粘りしどろろ
29. 暗褐色粘質土 粘りしどろろ
30. 暗褐色粘質土 粘りしどろろ
31. 暗褐色粘質土 粘りしどろろ
32. 暗褐色粘質土 粘りしどろろ
33. 暗褐色粘質土 粘りしどろろ
34. 暗褐色粘質土 粘りしどろろ
35. 暗褐色粘質土 粘りしどろろ
36. 暗褐色粘質土 粘りしどろろ
37. 暗褐色粘質土 粘りしどろろ
38. 暗褐色粘質土 粘りしどろろ
39. 暗褐色粘質土 粘りしどろろ
40. 暗褐色粘質土 粘りしどろろ
41. 暗褐色粘質土 粘りしどろろ
42. 暗褐色粘質土 粘りしどろろ
43. 暗褐色粘質土 粘りしどろろ
44. 暗褐色粘質土 粘りしどろろ
45. 暗褐色粘質土 粘りしどろろ
46. 暗褐色粘質土 粘りしどろろ
47. 暗褐色粘質土 粘りしどろろ
48. 暗褐色粘質土 粘りしどろろ

49. 灰色シルト 粘りしどろろ
50. 灰色シルト 粘りしどろろ
51. 灰色シルト 粘りしどろろ
52. 暗褐色粘質土 粘りしどろろ
53. 暗褐色粘質土 粘りしどろろ
54. 暗褐色粘質土 粘りしどろろ
55. 暗褐色粘質土 粘りしどろろ
56. 暗褐色粘質土 粘りしどろろ
57. 暗褐色粘質土 粘りしどろろ
58. 暗褐色粘質土 粘りしどろろ
59. 暗褐色粘質土 粘りしどろろ
60. 暗褐色粘質土 粘りしどろろ
61. 暗褐色粘質土 粘りしどろろ
62. 暗褐色粘質土 粘りしどろろ
63. 暗褐色粘質土 粘りしどろろ
64. 暗褐色粘質土 粘りしどろろ
65. 暗褐色粘質土 粘りしどろろ
66. 暗褐色粘質土 粘りしどろろ
67. 暗褐色粘質土 粘りしどろろ
68. 暗褐色粘質土 粘りしどろろ
69. 暗褐色粘質土 粘りしどろろ
70. 暗褐色粘質土 粘りしどろろ
71. 暗褐色粘質土 粘りしどろろ
72. 暗褐色粘質土 粘りしどろろ



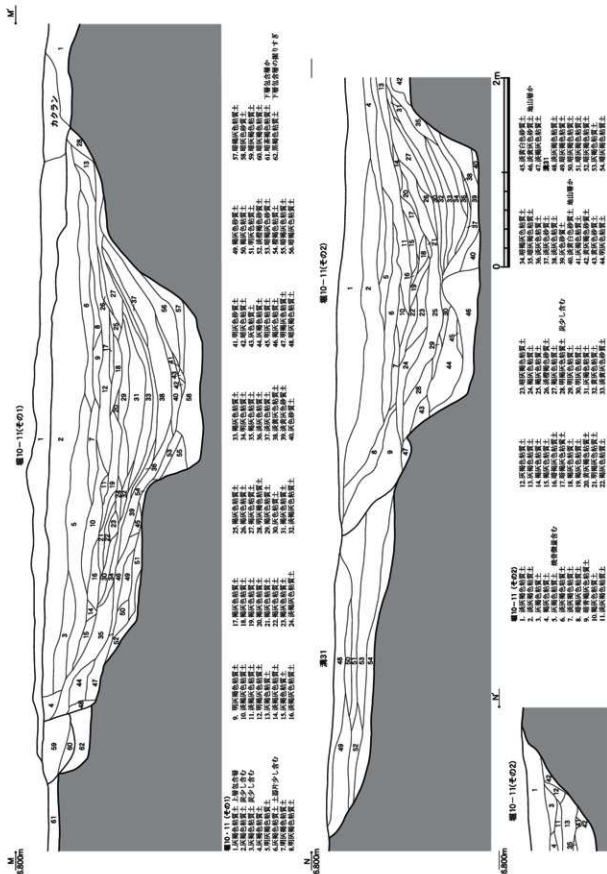
堀8・9 (その2)

1. 暗褐色粘質土 粘りやや強 しどろろ 土層片・炭若干含む
2. 暗褐色粘質土 粘りやや強 しどろろ
3. 暗褐色粘質土 粘りやや強 しどろろ 土層片・炭少し含む
4. 暗褐色粘質土 粘りやや強 しどろろ 炭少し含む
5. 暗褐色粘質土 粘りしどろろ
6. 暗褐色粘質土 粘りしどろろ
7. 暗褐色粘質土 粘りしどろろ
8. 暗褐色粘質土 粘りしどろろ
9. 暗褐色粘質土 粘りしどろろ
10. 暗褐色粘質土 粘りしどろろ
11. 暗褐色粘質土 粘りしどろろ

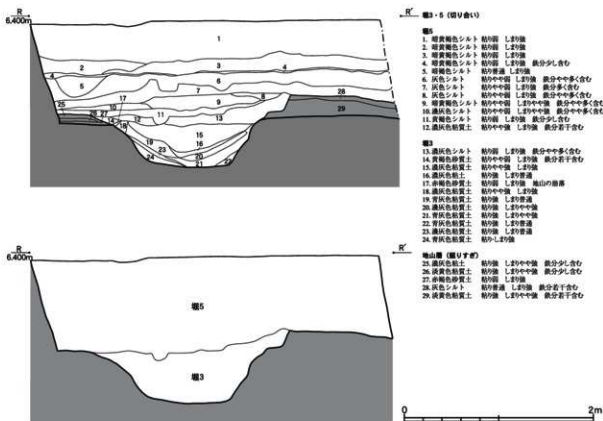
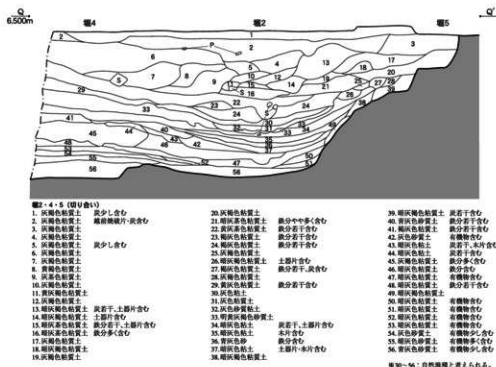
12. 暗褐色粘質土 粘りしどろろ
13. 暗褐色粘質土 粘りしどろろ
14. 暗褐色粘質土 粘りしどろろ
15. 暗褐色粘質土 粘りしどろろ
16. 暗褐色粘質土 粘りしどろろ
17. 暗褐色粘質土 粘りしどろろ
18. 暗褐色粘質土 粘りしどろろ
19. 暗褐色粘質土 粘りしどろろ
20. 暗褐色粘質土 粘りしどろろ
21. 暗褐色粘質土 粘りしどろろ
22. 暗褐色粘質土 粘りしどろろ

23. 暗褐色粘質土 粘りしどろろ
24. 暗褐色粘質土 粘りしどろろ
25. 暗褐色粘質土 粘りしどろろ
26. 暗褐色粘質土 粘りしどろろ
27. 暗褐色粘質土 粘りしどろろ
28. リーフ状砂質土 粘りしどろろ
29. リーフ状砂質土 粘りしどろろ
30. 暗褐色粘質土 粘りしどろろ
31. リーフ状砂質土 粘りしどろろ
32. 暗褐色粘質土 粘りしどろろ
33. リーフ状砂質土 粘りしどろろ

第23図 堀8・9 断面実測図 (縮尺1/40)



第24图 堀10・11断面実測図 (縮尺1/40)



第26図 堀2～5断面実測図 (縮尺1/40)

の東側が大幅に拡張されたのか（堀11→堀10）、当初からあった段差が流水の影響で落ちくぼんだにすぎないのか（最初から堀10のみ）、いずれとも断定できなかった。そのため、少なくとも最終的には両者が一体の堀として機能していた状況に鑑み、「堀10-11」と呼称することにした。なお、溝31（断面図その2）は、堀12と同じ下層遺構（墳墓周溝部）の痕跡である。

次に、堀の相互関係について記す。今回検出した堀は、東西に長く延びる堀2・3を支線とすると、堀2から分岐する堀4～10-11と、堀3から分岐する堀1・5・6のグループに二分される。この2つのグループは堀5のみ重複するが、堀5と堀6は非常に近接している。堀割の構成としては不自然であり、時期差を想定すべきであろう。以下、各堀の先後関係をグループごとに検証していく。

堀2・堀4～10-11 まず、堀2と堀4・5（第26図上）については、上半部の堆積が不規則に乱れるものの、下半部では薄い土層が一樣に堆積し、明瞭な切り合いは見出せないことから、堀2・4・5はいずれも同時に存在したと推測される。堀2と堀7は規模がほぼ同等で、L字状につながることから、一連の堀であったと推測される。堀2と堀8については、堀2・7・8覆土（第25図下）がおおむね一様な堆積状況を示していることから、これも同時に存在したと推測される。堀8と堀9（第23図）については覆土の堆積がほぼ一様で、明瞭な切り合いは見出せないことから、これも同時に存在していたものと推測される。また、堀9と堀10-11は規模がほぼ同等で、L字状につながるどころから、一連の堀であったと推測される。つまり、堀2・4～10-11はすべて同時に存在していたものと判断される。

堀3・堀1・5・6 堀3と堀1については、交差部の断面図がないため、推測の域を出ないが、丁字状につながることから、堀1が堀3に先行して単独で存在し得た状況は想定しがたい。むしろ、堀3と同時か、後に付け足されたと見なすのが妥当であろう。堀3と堀5の場合は、両者の幅は同等程度であるが、深さは堀3の方が一段深くなっている。そこで交差部の切り合い（第26図下）を見ると、堀5に相当する上段の堆積は全体に一貫しており、堀3に相当する下段からの切り合い（立ち上がり）は認められないため、堀5は堀3に後行するものと判断される。堀3と堀6は規模がほぼ同等で、L字状につながるどころから、一連の堀であったと推測される。つまり、堀1・3・6はほぼ同時に存在し、堀5に先行するものと判断される。

以上の結論をまとめると、これらの堀は、堀1・3・6と堀2・4～10-11の2つのグループに分かれ、堀1・3・6→堀2・4～10-11という先後関係が成立する。さらに、先行する堀3・6に埋め立てられた痕跡が認められること、後行する区画の方が広範囲かつ大規模であることから、ある時期に当地で大規模な堀割の更新と区画の拡張がおこなわれたものと判断される。

第2表 堀一覧表（1）

遺構名	地区	方位	幅(m)	深さ(m)	底の傾斜	出土遺物	備考	押図No.
堀1	E-F86	N5°W	3.3～3.7	1.2～1.3	南方へ若干下降	土師質皿、古瀬戸（小皿）	堀3と交差	第19図
堀2	C-D83～90	N85°E	2.3～3.0	1.0～1.7	西方へ下降	土師質皿、須恵器坏瓦、越前焼埴・鉢・磁鉢・小皿、青磁碗・盃・香炉・白磁碗、天目鉢、古瀬戸平鉢・煎皿・煎鉢、小皿、瓦葺瓦葺	堀4・5・6・7・8と交差	第19・25・26図
堀3	D-E84～91	N86°E	2.2～2.9	1.5～1.7	東方へ下降	土師質皿	井戸18と重複、堀1・5・6と交差、井戸18、堀5に先行	第22・26図
堀4	Z～C84・85	N9°W	1.9～2.7	1.5	平坦	土師質皿、天目鉢、越前焼埴	堀2と交差	第20・26図
堀5	C-F84・85	N4°W	2.6～2.9	1.0～1.1	北方へ下降	土師質皿、越前焼埴・磁鉢	堀6と重複、堀2・3と交差	第21・26図
堀6	E-F84	N10°W	2.5～3.0	1.4～1.5	南方へ若干下降	土師質皿	堀5と重複、堀2・3と交差	第21図
堀7	C-F82・83	N1°E	3.2～3.7	1.4～1.5	南方へ若干下降	土師質皿	堀2と交差、堀2に先行	第21・22・25図
堀8	A～C83	N4°W	4.3～5.1	1.3～1.4	南方へ若干下降	土師質皿、越前焼埴、青磁碗	堀2・9と交差	第22・23図
堀9	A-B81～83	N89°E	2.3～2.6	1.4	平坦	土師質皿、土師、青磁碗、白磁碗	堀8・10-11と交差	第25図
堀10-11	A～F81・82	N1°W	3.1～4.0	1.3～1.5	北方へ下降	土師質皿、青磁碗、白磁碗	堀9、12と交差	第24図
（堀12）	—	—	—	—	—	—	下層遺構（墳墓周溝）の痕跡	—

3 井戸

井戸20基のうち、井戸枠を残す（痕跡を含む）ものは4基で、すべて曲物枠であった。複数の井戸が重複・連結する例も二三見られ、同じ場所での掘削を繰り返していた様子がうかがえる。

平面形状は楕円形や不整形円形が主体で、大きさは最大径が1.0m以下から4.0m以上まで様々あり、形状・大きさとも規格性のようなものは特に見受けられない。一方、深さは1.4～1.7m前後のものが全体の半数を占める。ただ、後述するように、井戸の内壁が大きく崩落した事例や、廃絶後に井戸枠が除去された事例なども想定されるので、実際に検出した掘り方の規模や枠の有無など、当時の井戸本来の状況と必ずしも一致していない可能性に留意しておく必要がある。以下、主要なものについて概要を記すが、個々の詳細は一覧表（第3表）を参照されたい。

井戸2（第27図） 井戸1とともに井戸12を挟み込むように連結する（第9図）。溝13・堀3と重複するが、井戸内壁が湧水の影響で下方から抉れ、上半部まで大きく崩落した状況が断面図から想定されることから、井戸本来の規模は一回り小さかったと推測される。特に3～5層は位置関係から溝13覆土と推測されるが、これも溝が井戸の覆土を切り込んでいると言うよりも、井戸に隣接する溝の覆土までが井戸内壁もろとも崩落した可能性が高い。なお、図示していないが、井戸1・溝13・堀3の断面図から、堀3→溝13→井戸1という先後関係が判明している。

井戸3（第28図） 井戸2に隣接する（第9図）。このほか、複数の井戸（井戸4・5・7など）が密集しており、周辺で掘削を繰り返していたことがうかがえる。木製品も出土したが、井戸枠やその部材などは遺存していなかった。

井戸6・8（第29図） 断面図から井戸8→井戸6という先後関係が確認できる。また、井戸6は井戸の本体部分と掘り方が明確に分かれており、井戸本体が中心ではなく、南壁側に寄っている。木製品も出土しているが、井戸枠やその部材などは遺存していなかった。

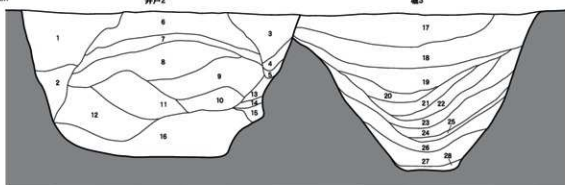
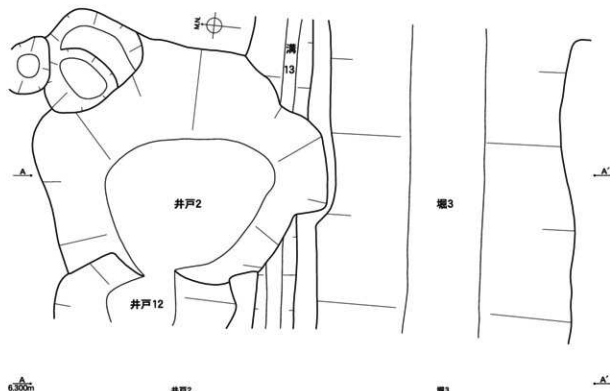
井戸9・11（第30図）ともに曲物の井戸枠を残すが、井戸9の枠はその大半が腐食して原形を留めず、その痕跡が覆土断面に認められた。一方、井戸11の枠は、南東隅に掘り込まれた小さな掘り方の底部で一段分のみ検出したため、井戸廃棄の際に抜き取られた可能性が指摘できる。

井戸10（第31図） 覆土の上部にビット覆土の痕跡が複数残り、一部は建物2の柱穴と推定される。

井戸13（第32図） 本遺跡の井戸では唯一、隅丸方形の平面形状を呈する。平面規模（3.6×3.4m）に比して、深さ（1.3m）はさほどでもない。建物の項でも記したように、覆土に建物7の柱穴と見られるビット覆土の痕跡が散見され、建物7に先行すると判断されるが、西辺の両端部に柱穴らしきビットがあることから、何らかの上部構造物を伴っていた可能性も指摘できる。また、堀2南壁段差部の覆土を掘り込んでいることから、堀2に後行すると判断される。調査の過程では井戸に分類したが、形状や規模などほかの井戸と大きく異なり、いわゆる井戸とは断定しがたい。おそらく、ため池のような貯水施設であったものと推測される。

井戸14・16（第33図） 井戸14は堀6と切り合うが、先後関係は不明である。井戸16は最大径が1.4m前後と小さいが、深さは2.0mを超え、本遺跡で最も深い井戸の一つである。覆土には炭化物や有機物（昆虫・植物遺体など）が多く含まれるほか、多数の土師質皿が出土している。

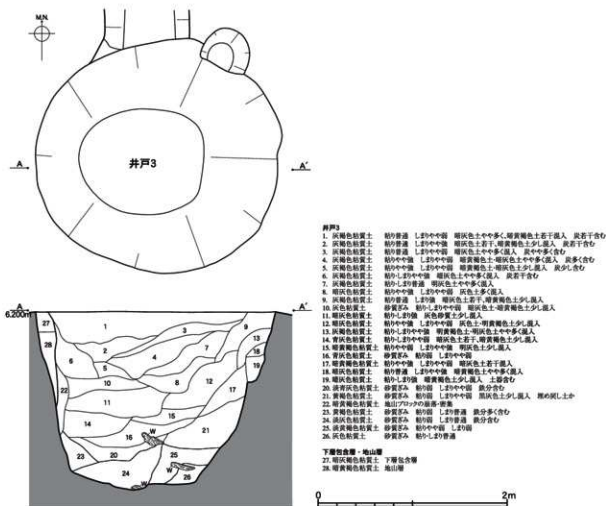
井戸19（第34図） 堀2に隣接するが、直接切り合っていない。底部で曲物の井戸枠数段分を潰れた状態で検出した。



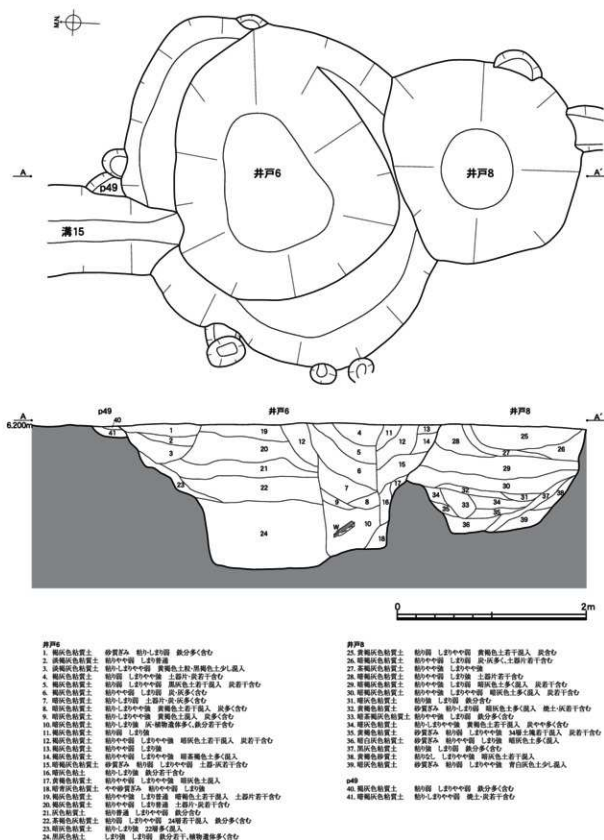
0 2m

- 井戸2**
1. 黒褐色粘質土 粘土層 土質 黒褐色土少し混入 下層は含砂の崩れ
 2. 黒褐色粘質土 粘土層 土質 黒褐色土若干混入 地山の崩れ
 3. 黒褐色粘質土 粘土層 土質 黒褐色土少し混入
 4. 黒褐色粘質土 粘土層 土質 黒褐色土やや多く混入 炭を含む
 5. 黒褐色粘質土 粘土層 土質 黒褐色土多く混入 炭を含む
 6. 黒褐色粘質土 粘土層 土質 黒褐色土若干混入 炭を含む
 7. 黒褐色粘質土 粘土層 土質 黒褐色土若干混入
 8. 黒褐色粘質土 粘土層 土質 黒褐色土多く、黒褐色土やや多く混入 土砂・炭を含む
 9. 黒褐色粘質土 粘土層 土質 黒褐色土少し混入
 10. 黒褐色粘質土 粘土層 土質 黒褐色土少し混入
 11. 黒褐色粘質土 粘土層 土質 黒褐色土・黒褐色土若干混入 炭を含む
 12. 黒褐色粘質土 粘土層 土質 黒褐色土少し混入
 13. 黒褐色粘質土 粘土層 土質 黒褐色土・黒褐色土やや多く混入
 14. 黒褐色粘質土 粘土層 土質 黒褐色土・黒褐色土やや多く混入
 15. 黒褐色粘質土 粘土層 土質 黒褐色土・黒褐色土多く混入
 16. 黒褐色粘質土 粘土層 土質 黒褐色土少し混入
- 塚3**
17. 黒褐色粘質土 粘土層 土質 黒褐色土多く、黒褐色土若干混入 土砂・炭を含む
 18. 黒褐色粘質土 粘土層 土質 黒褐色土・黒褐色土若干混入 土砂・炭を含む
 19. 灰白色土 粘土層 土質 灰白色土・黒褐色土若干混入 炭を含む
 20. 灰白色土 粘土層 土質 灰白色土・黒褐色土若干混入 炭を含む
 21. 灰白色土 粘土層 土質 灰白色土・黒褐色土若干混入 炭を含む
 22. 灰白色土 粘土層 土質 灰白色土・黒褐色土若干混入
 23. 灰白色土 粘土層 土質 灰白色土・黒褐色土少し混入
 24. 灰白色土 粘土層 土質 灰白色土・黒褐色土若干混入
 25. 灰白色土 粘土層 土質 灰白色土・黒褐色土若干混入 炭を含む
 26. 灰白色土 粘土層 土質 灰白色土・黒褐色土若干混入 炭を含む
 27. 灰白色土 粘土層 土質 灰白色土・黒褐色土若干混入 炭を含む
 28. 灰白色土 粘土層 土質 灰白色土・黒褐色土若干混入 炭を含む

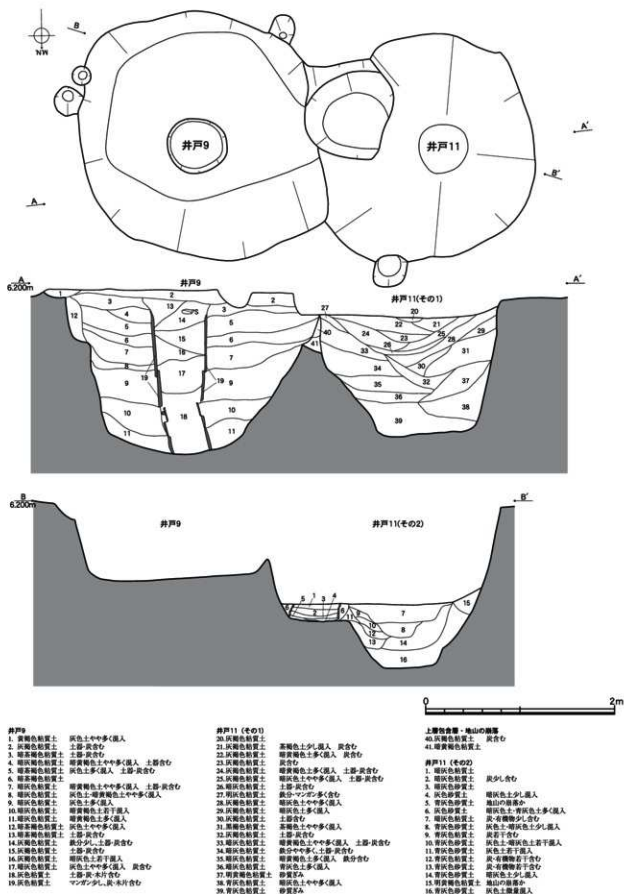
第27図 井戸2・12実測図 (縮尺1/40)



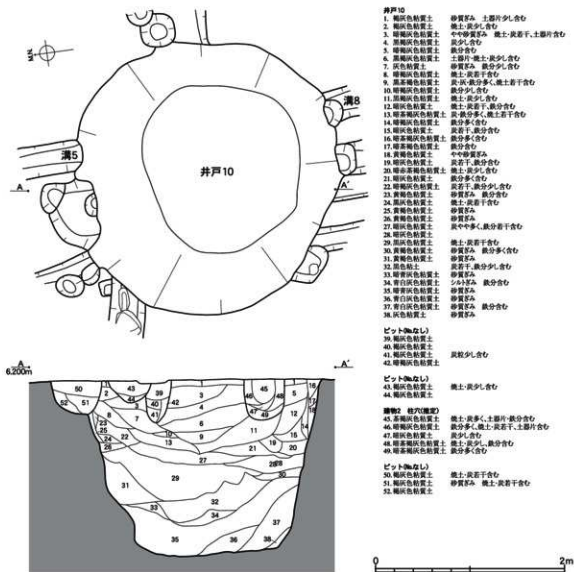
第28図 井戸3実測図（縮尺1/40）



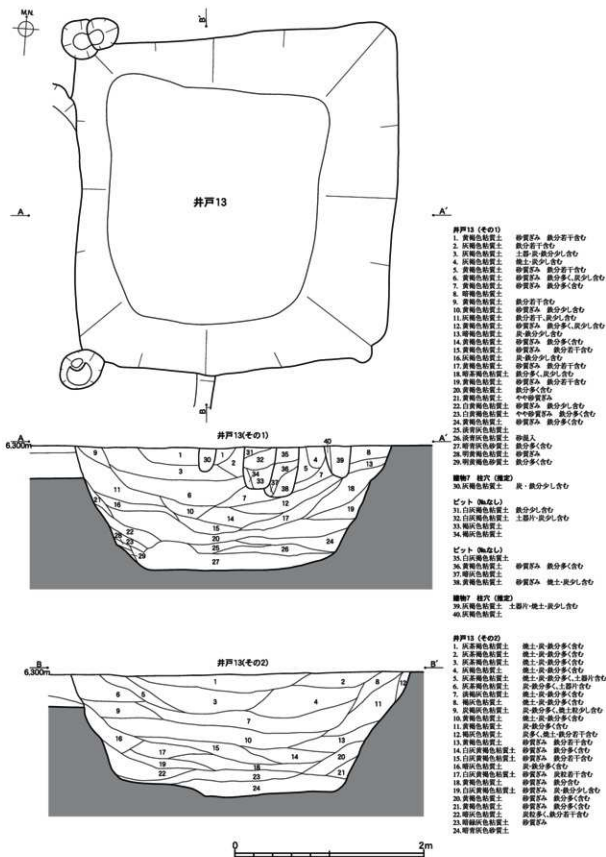
第29図 井戸6・8実測図（縮尺1/40）



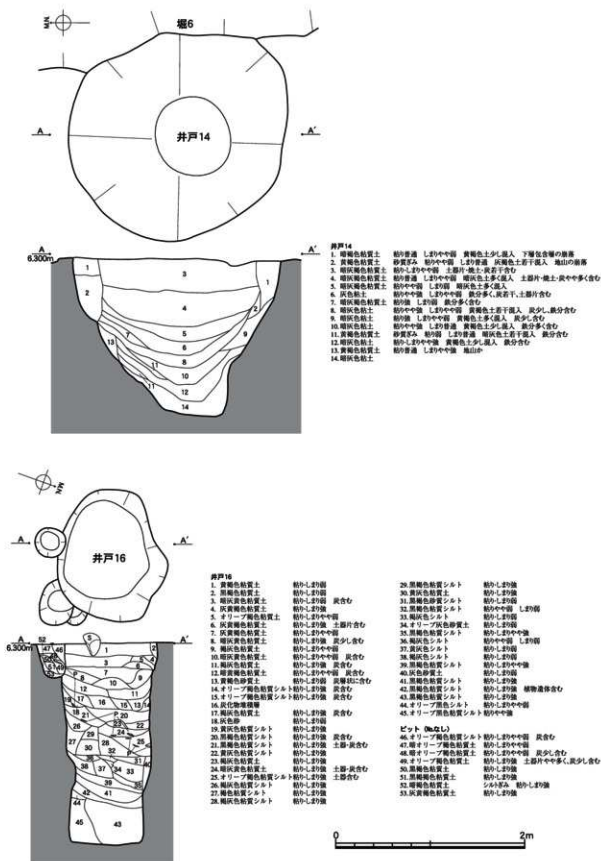
第30図 井戸9・11実測図(縮尺1/40)



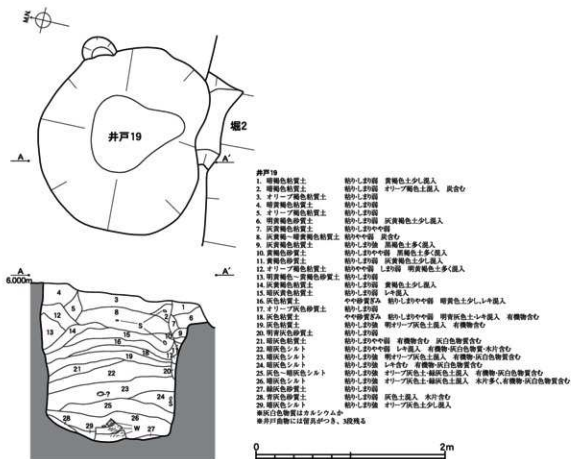
第31図 井戸10実測図 (縮尺1/40)



第32図 井戸13実測図 (縮尺1/40)



第33図 井戸14・16実測図 (縮尺1/40)



第34図 井戸19実測図 (縮尺1/40)

第3表 井戸一覧表 (1)

遺構名	地区	平面形状	平面規模(m)	深さ(m)	井戸枠	出土遺物	備考	押図No.
井戸1	E87～88	不整円形	3.1(直径)	2.1		越前焼陶鉢	井戸12に連結	—
井戸2	E88～89	不整円形	3.1×2.4	1.5		土師質皿	井戸12に連結、堀3に先行	第27図
井戸3	E・F88～89	円形	2.5(直径)	1.9		越前焼陶鉢		第28図
井戸4	E・F88	不整形	2.5×3.1	1.7				—
井戸5	E・F87～88	円形	0.8(直径)	1.3				—
井戸6	E・F89～90	楕円形	4.0×3.3	1.5		古瀬戸小皿	井戸8に連結、先行	第29図
井戸7	E89	楕円形	1.4×1.7	1.3		土師質皿	建物5と重複	—
井戸8	E90	楕円形	2.3×1.9	1.1		土師質皿、古瀬戸天目埴	井戸6に連結	第29図
井戸9	E91	楕円形	3.1×2.7	1.7	曲物	越前焼鉢	井戸11に連結、建物3と重複	第30図
井戸10	E・F91～92	円形	2.9(直径)	1.9		土師質皿	建物2と重複	第31図
井戸11	E90～91	楕円形	2.6×2.4	1.4	曲物		井戸9に連結、建物3と重複	第30図
井戸12	E88	不明	(1.9)	1.6			井戸1-2に連結	第27図
井戸13	B・C89～90	方形	3.6×3.4	1.3		土師質皿	建物7と重複	第32図
井戸14	D-E84	楕円形	2.4×2.1	1.6			堀6と重複	第33図
井戸15	F・G89～90	円形	(2.3)直径	2.0	曲物	青磁碗、越前焼壺		—
井戸16	B88	楕円形	1.4×1.2	2.1		土師質皿、天目埴	建物8と重複	第33図
井戸17	B88～89	楕円形	0.9×2.2	1.4			建物7と重複	—
井戸18	D89	不明	—	—			堀3と重複、堀3覆土を掘り込む	—
井戸19	D87～88	歪円形	2.0×1.7	1.7	曲物		堀2と重複	第34図
井戸20	B89	不整円形	0.9×1.0	1.5				—

第2節 平成12・13年度調査区〔図版第11・12、第35～49図、第4～7表〕

本調査区で検出した上層遺構は、掘立柱建物5棟、井戸6基、堀1条、溝25条、土坑62基、ビット129基（溝・土坑・ビットは遺物を出土したもののみ）をそれぞれ数える。本節ではこれらの遺構のうち、代表的なものを抽出・記述する。

1 掘立柱建物

掘立柱建物5棟の内訳は、総柱建物が1棟（建物13）、側柱建物が4棟（建物12・14～16）である。平面形状はすべて略長方形で、桁行の柱間は2.4～2.6mのものが最も多いが、同一建物でも必ずしも一定はしていない。梁行の柱間については、同じ建物の桁行やほかの建物との共通性は認められない。柱穴は径30～50cm、深さ10～30cm程度の不整円形のビットが大半で、見た目にも柱穴自体がかなり画一化している印象を受ける。建物の方位については、棟数が少ないこともあろうが、特に注目されるような規則性は見受けられない。遺物はいずれの建物の柱穴からも得られなかった。

建物12・14は桁行が4.0m以下の比較的小型の建物で、建物13・15・16は桁行が6.0mを超える大型の建物である。張り出し部などを持つなど、形態・構造などについて特に注目される建物はないが、柱穴の配列に特徴を有する事例（建物13・15）が認められた。以下、概要を記すが、個々の詳細は一覧表（第4表）を参照されたい。

建物12～14（第35図） 建物12は1×1間に見えるが、調査区南際に位置するため、区外に伸展する可能性を考慮し、断定を避けた。建物13は本調査区で唯一の総柱建物で、基本構造は3×2間だが、西梁行間の柱穴を欠く。また、南・北桁行とも、西端の1間（1.8m）とほかの2間（ともに2.4m）とで柱間に差があり、意図的に設定したと見られる。おそらくは建物の構造に起因するものと推測される。建物14は2×1間だが、梁行（1.8m）が桁行の柱間（2.2m）より短く、平面形状が全体に細長い。

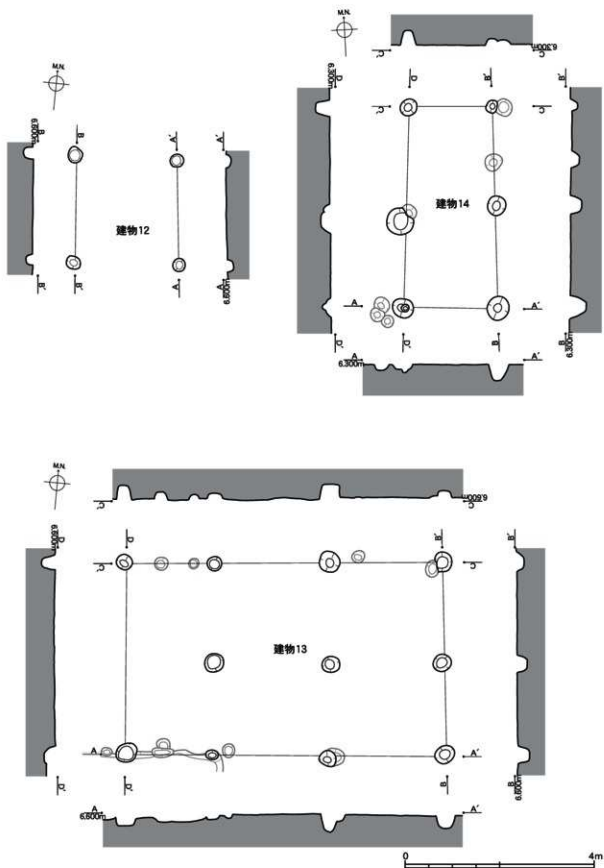
建物15・16（第36図） 建物15は南・北桁行とも、両端の各1間（1.6m）と中2間（2.4m）とで柱間かなりの差があり、意図的に設定したと見られる。これも建物13と同様に、やはり建物の構造に起因するものと推測される。また、西梁行の中間付近にビット1基があるが、これに対応するビットが東梁行に見出せなかったため、建物の柱穴には含めなかった。建物16は2×1間で、梁行（2.4m）が桁行の柱間（2.8m・3.0m）より短く、平面形状が全体に細長い。

第4表 掘立柱建物一覧表（2）

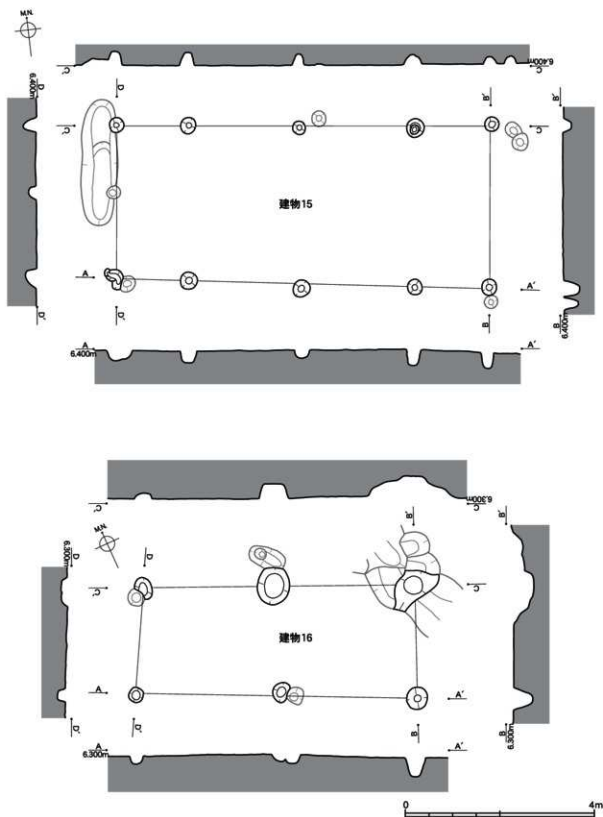
遺構名	地区	桁×梁	構造 方位 (桁行方向)	桁行(m)	梁行(m)	出土遺物	備考	押図No.
建物12	Z77～78	17×1	側柱 N5°W	(2.3)	2.2			第35図
建物13	A・B71～72	3×1(西梁) 2(東梁)	総柱 N84°E	6.8	4.1		西梁の柱穴が1基少ない。 土坑62と重複。	第35図
建物14	D・E68	2×1	側柱 N3°E	4.3	2.0			第35図
建物15	A・B66～68	4×1	側柱 N82°W	7.9	3.4			第36図
建物16	E・F62～63	2×1	側柱 N64°E	6.0	2.4			第36図

2 井戸

井戸6基のうち、井戸枠を残すものは3基、うち板枠が1基、曲物枠が2基であった。基数が少ないことから、平面形状・大きさ・深さなどに傾向を見出すのは難しいが、井戸21・22および井戸23～26がそれぞれ近隣しており、特に後者からは同じ場所で掘削を繰り返していた様子がうかがえる。以下、概要を記すが、個々の詳細は一覧表（第5表）を参照されたい。



第35図 建物12～14実測図 (縮尺1/80)



第36図 建物15・16実測図 (縮尺1/80)

井戸21(第37図) 大きさ・深さとも本遺跡最大の井戸で、掘り方のほぼ中央部に杵を残す。杵はまず角材で一辺約0.9mの立方体の杵を組み置いて、その四方に長さ1.0m前後、幅0.10～0.15m前後の板材を矢板状に差し並べるもので、さらに泥溜め用と見られる曲物が底面中央に置かれる。杵の内部には多量の礫が詰まり、井戸の廃棄時に投入されたと考えられる。井戸杵の構造から、鎌倉期の築造と推測される。

井戸22・23(第38図) 井戸22は井戸21に隣接する小型の井戸で、底面から陶器(甕か壺)の底部のみ出土している。井戸23は底面に曲物が置かれていたと見られるが、腐食・劣化がひどく、本来の形状を留めていなかった。また、底面近くの内壁には崩落した痕跡が認められる。

井戸24(第39図) 掘り方の規模はさほど大きくないが、直径60cm、高さ60～70cm、板の厚さ1～2cmを測る大型の曲物が井戸下部に埋め込まれる。その曲物の上部には長さ0.6～0.7m、幅0.1m前後の板材が各辺1点ずつ方形に配され、この面が当時の井戸の使用面と見られる。

井戸25(第40図) 比較的大型の井戸だが、井戸杵は遺存していなかった。断面図より土坑119に先行すると判断される。先に記したように、この井戸25から順に西へ向かって、井戸26・23・24と近接して並んでおり、同じ場所で井戸を繰り返し掘削した状況が推測される。覆土から12～13世紀頃のものと思われる土鍋(第66図)と、底面近くで畜串2点が出土している。

井戸26(第41図) 井戸25同様、土坑119に先行する。

第5表 井戸一覧表(2)

遺構名	地区	平面形状	平面規模(m)	深さ(m)	井戸杵	出土遺物	備考	挿図No.
井戸21	D-E74～75	楕円形	4.5×4.0	2.5	板杵			第37図
井戸22	D75	円形	0.9(直径)	1.4				第38図
井戸23	F69	—	2.2(最大径)	2.0	曲物			第38図
井戸24	E-F69	—	1.9(最大径)	2.2	曲物・板		曲物と板の組み合わせ杵	第39図
井戸25	F70～71	楕円形	3.2×3.0	2.0		土鍋・畜串	土坑119と重複	第40図
井戸26	F26	円形	2.0(直径)	1.4			土坑119と重複	第41図

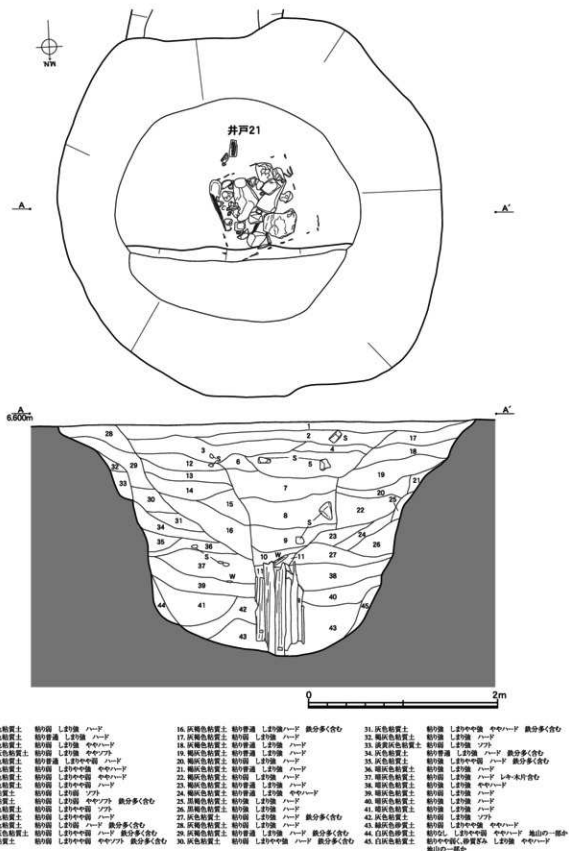
3 堀・溝

本項では溝25条のうち、主要なものについて概要を記す。個々の詳細は一覧表(第6表)を参照されたい。なお、堀14(第10図)は南壁最上部のごく一部を検出しただけであり、次調査区(平成14～16年度調査区)の検出状況の方が良好であるため、詳細は次節で記す。

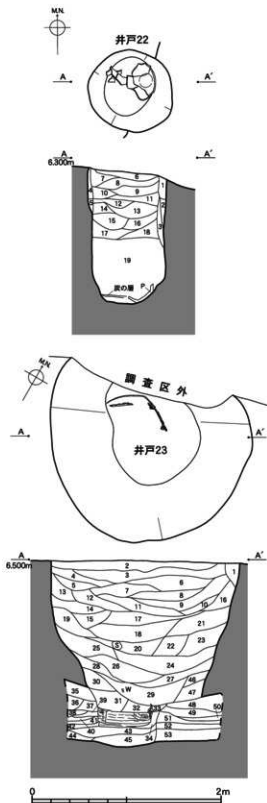
溝39～41(第42・43図) 溝39はC75区付近で掘削(コンクリート基礎部)や下層遺構(墳墓周溝部)との重複に紛れたため、検出を中止したが、その後の下層調査時に北方へ伸長する部分を見出している(第11図朱網掛部)。これによれば、溝39は南半部では溝40・41に近い方向を向くが、ちょうど検出を中断した付近で方向を変え、北半部では堀13に近い方向を向く。

溝40・41は併行しながら、調査区をほぼ南北に縦貫する。溝40は溝41に先行するが、両者は非常に近接しており、同様の方向を向いているところから、同一目的でほぼ時期を空けずに掘削された新旧の溝と推測される。溝41より19世紀頃の越前焼播鉢の破片が出土していることから、ともに近世以降の遺構と見られる。

堀13(第43図) 堀13は堀14と丁字状につながり、断面は築研状を呈する。前章註釈でも触れたように、調査の過程では堀に分類したが、当調査区の遺構検出状況から推察するに、少なくとも前節で示した大規模な土地区画を企図した「堀」と同様の遺構とは見えなしく、むしろ幅・深さなどの規模は前出の溝39・40などと大差ないところから、これらと同様の「溝」と判断した。



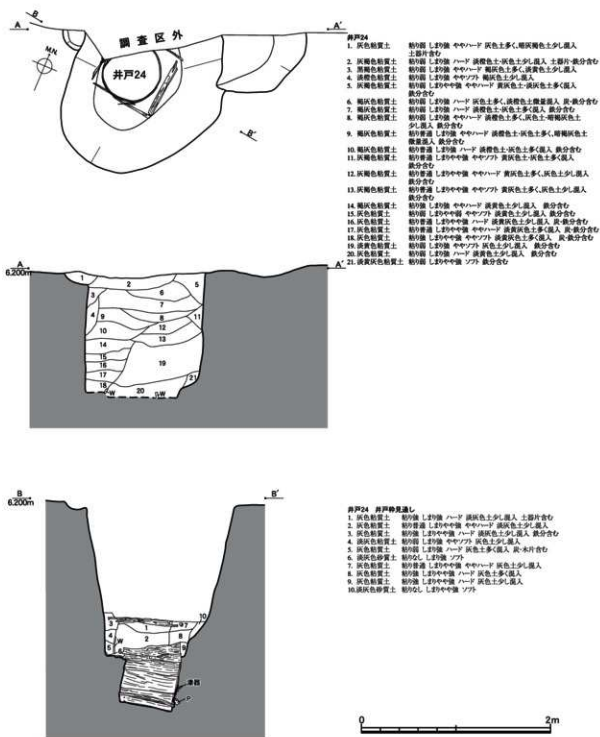
第37図 井戸21実測図(縮尺1/40)



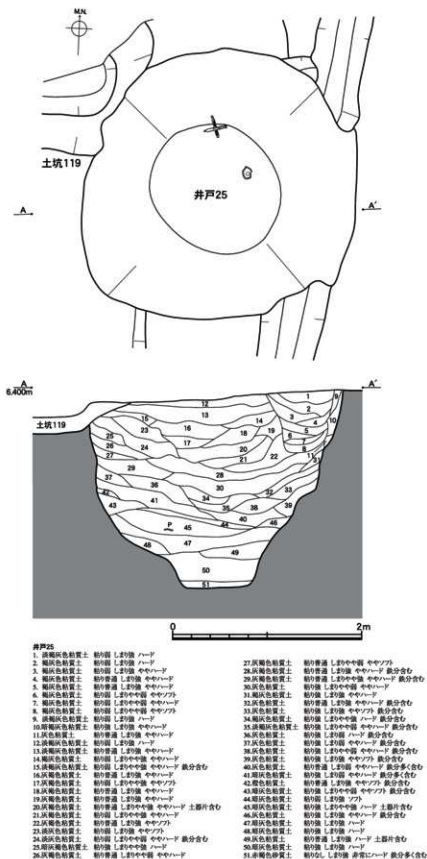
第38図 井戸22・23実測図 (縮尺1/40)

- 井戸22**
1. 褐色粘土質土 砂層下 砂層 フタ 灰色土少し混入
 2. 褐色粘土質土 砂層下 砂層 ヤマノ 灰色土少し混入
 3. 褐色粘土質土 砂層下 砂層 ハード 灰色土少し混入
 4. 褐色粘土質土 砂層下 砂層 フタ 灰色土少し混入
 5. 褐色粘土質土 砂層下 砂層 ヤマノ ハード 灰色土少し混入
 6. 褐色粘土質土 砂層下 砂層 ヤマノ ハード 褐色土少し混入 鉄分含む
 7. 褐色粘土質土 砂層下 砂層 ハード 褐色土少し混入 鉄分含む
 8. 褐色粘土質土 砂層下 砂層 ヤマノ ハード 褐色土少し混入 鉄分含む
 9. 褐色粘土質土 砂層下 砂層 ヤマノ ハード 褐色土少し混入 鉄分含む
 10. 褐色粘土質土 砂層下 砂層 ヤマノ ハード 褐色土少し混入 鉄分含む
 11. 褐色粘土質土 砂層下 砂層 ハード 褐色土少し混入
 12. 褐色粘土質土 砂層下 砂層 ヤマノ ハード 褐色土少し混入 鉄分含む
 13. 褐色粘土質土 砂層下 砂層 ハード 褐色土少し混入 鉄分含む
 14. 褐色粘土質土 砂層下 砂層 ヤマノ ハード 褐色土少し混入 鉄分含む
 15. 褐色粘土質土 砂層下 砂層 ハード 褐色土少し混入 鉄分含む
 16. 褐色粘土質土 砂層下 砂層 ハード 褐色土少し混入 鉄分含む
 17. 褐色粘土質土 砂層下 砂層 ハード 褐色土少し混入 鉄分含む
 18. 褐色粘土質土 砂層下 砂層 ハード 褐色土少し混入 鉄分含む
 19. 褐色粘土質土 砂層下 砂層 ハード 褐色土少し混入 鉄分含む

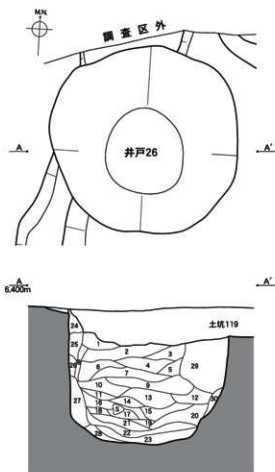
- 井戸23**
1. 褐色粘土質土 砂層下 砂層 ハード 褐色土少し混入
 2. 褐色粘土質土 砂層下 砂層 ハード 褐色土少し混入 鉄分含む
 3. 褐色粘土質土 砂層下 砂層 ヤマノ ハード 褐色土少し混入 鉄分含む
 4. 褐色粘土質土 砂層下 砂層 ハード 褐色土少し混入 鉄分含む
 5. 褐色粘土質土 砂層下 砂層 ハード 褐色土少し混入 鉄分含む
 6. 褐色粘土質土 砂層下 砂層 ヤマノ ハード 褐色土少し混入 鉄分含む
 7. 褐色粘土質土 砂層下 砂層 ヤマノ ハード 褐色土少し混入 鉄分含む
 8. 褐色粘土質土 砂層下 砂層 ヤマノ ハード 褐色土少し混入 鉄分含む
 9. 褐色粘土質土 砂層下 砂層 ヤマノ ハード 褐色土少し混入 鉄分含む
 10. 褐色粘土質土 砂層下 砂層 ヤマノ ハード 褐色土少し混入 鉄分含む
 11. 褐色粘土質土 砂層下 砂層 ヤマノ ハード 褐色土少し混入 鉄分含む
 12. 褐色粘土質土 砂層下 砂層 ハード 褐色土少し混入 鉄分含む
 13. 褐色粘土質土 砂層下 砂層 ヤマノ ハード 褐色土少し混入 鉄分含む
 14. 褐色粘土質土 砂層下 砂層 ヤマノ ハード 褐色土少し混入 鉄分含む
 15. 褐色粘土質土 砂層下 砂層 ハード 褐色土少し混入 鉄分含む
 16. 褐色粘土質土 砂層下 砂層 ハード 褐色土少し混入 鉄分含む
 17. 褐色粘土質土 砂層下 砂層 ヤマノ ハード 褐色土少し混入 鉄分含む
 18. 褐色粘土質土 砂層下 砂層 ヤマノ ハード 褐色土少し混入 鉄分含む
 19. 褐色粘土質土 砂層下 砂層 ヤマノ ハード 褐色土少し混入 鉄分含む
 20. 褐色粘土質土 砂層下 砂層 ヤマノ ハード 褐色土少し混入 鉄分含む
 21. 褐色粘土質土 砂層下 砂層 ヤマノ ハード 褐色土少し混入 鉄分含む
 22. 褐色粘土質土 砂層下 砂層 ハード 褐色土少し混入
 23. 褐色粘土質土 砂層下 砂層 ハード 褐色土少し混入
 24. 褐色粘土質土 砂層下 砂層 ヤマノ ハード 褐色土少し混入
 25. 褐色粘土質土 砂層下 砂層 ヤマノ ハード 褐色土少し混入
 26. 褐色粘土質土 砂層下 砂層 ハード 褐色土少し混入
 27. 褐色粘土質土 砂層下 砂層 ヤマノ ハード 褐色土少し混入
 28. 褐色粘土質土 砂層下 砂層 ハード 褐色土少し混入
 29. 褐色粘土質土 砂層下 砂層 ヤマノ ハード 褐色土少し混入
 30. 褐色粘土質土 砂層下 砂層 ヤマノ ハード 褐色土少し混入
 31. 褐色粘土質土 砂層下 砂層 ハード 褐色土少し混入
 32. 褐色粘土質土 砂層下 砂層 ヤマノ ハード 褐色土少し混入
 33. 褐色粘土質土 砂層下 砂層 ヤマノ ハード 褐色土少し混入
 34. 褐色粘土質土 砂層下 砂層 フタ 褐色土少し混入
 35. 褐色粘土質土 砂層下 砂層 ヤマノ フタ 褐色土少し混入
 36. 褐色粘土質土 砂層下 砂層 フタ 褐色土少し混入
 37. 褐色粘土質土 砂層下 砂層 ヤマノ フタ 褐色土少し混入
 38. 褐色粘土質土 砂層下 砂層 フタ 褐色土少し混入
 39. 褐色粘土質土 砂層下 砂層 フタ 褐色土少し混入
 40. 褐色粘土質土 砂層下 砂層 フタ 褐色土少し混入
 41. 褐色粘土質土 砂層下 砂層 フタ 褐色土少し混入
 42. 褐色粘土質土 砂層下 砂層 フタ 褐色土少し混入
 43. 褐色粘土質土 砂層下 砂層 フタ 褐色土少し混入
 44. 褐色粘土質土 砂層下 砂層 フタ 褐色土少し混入
 45. 褐色粘土質土 砂層下 砂層 フタ 褐色土少し混入
 46. 褐色粘土質土 砂層下 砂層 フタ 褐色土少し混入
 47. 褐色粘土質土 砂層下 砂層 フタ 褐色土少し混入
 48. 褐色粘土質土 砂層下 砂層 フタ 褐色土少し混入
 49. 褐色粘土質土 砂層下 砂層 フタ 褐色土少し混入
 50. 褐色粘土質土 砂層下 砂層 フタ 褐色土少し混入
 51. 褐色粘土質土 砂層下 砂層 フタ 褐色土少し混入
 52. 褐色粘土質土 砂層下 砂層 フタ 褐色土少し混入
 53. 褐色粘土質土 砂層下 砂層 フタ 褐色土少し混入



第39図 井戸24実測図（縮尺1/40）



第40図 井戸25実測図 (縮尺1/40)



第41図 井戸26実測図 (縮尺1/40)

- 井戸26
1. 褐色粘質土 粘り普通 しどろ 硬 白色土・淡黄色土少し混入 鉄含む
 2. 褐色粘質土 粘り普通 しどろ 硬 灰色土・淡黄色土多く混入 鉄含む
 3. 褐色粘質土 粘り固 しどろ やや硬 灰色土・淡黄色土多く混入 鉄分含む
 4. 灰褐色粘質土 粘り普通 しどろ 硬 灰色土・淡黄色土多く混入 鉄分含む
 5. 灰褐色粘質土 粘り普通 しどろ 硬 灰色土多く・淡黄色土少し混入 鉄含む
 6. 灰褐色粘質土 粘り普通 しどろ 硬 灰色土多く・淡黄色土少し混入 鉄含む
 7. 淡褐色粘質土 粘り固 しどろ 硬 灰色土多く・淡黄色土少し混入
 8. 褐色粘質土 粘り普通 しどろ 硬 白色土多く・淡黄色土少し混入
 9. 褐色粘質土 粘り固 しどろや中 やや硬 灰色土多く・淡黄色土少し混入 鉄分含む
 10. 淡褐色粘質土 粘り普通 しどろや中 やや硬 灰色土多く・淡黄色土少し混入 鉄分含む
 11. 灰色粘質土 粘り普通 しどろや中 やや硬 鉄分含む
 12. 褐色粘質土 粘り固 しどろや中 やや硬 淡黄色土少し混入 鉄分含む
 13. 灰色粘質土 粘り普通 しどろや中 やや硬 淡黄色土少し混入 鉄分含む
 14. 淡黄色粘質土 粘り固 しどろ 硬 鉄分含む
 15. 暗褐色粘質土 粘り固 しどろ 硬 灰色土・淡黄色土少し混入
 16. 暗褐色粘質土 粘り固 しどろ 硬 灰色土・淡黄色土少し混入
 17. 暗褐色粘質土 粘り固 しどろ 硬 灰色土多く混入
 18. 淡黄色粘質土 粘り普通 しどろ 硬 褐色土少し混入 鉄分含む
 19. 暗褐色粘質土 粘り固 しどろや中 やや硬 淡黄色土少し混入
 20. 暗褐色粘質土 粘り固 しどろや中 やや硬 灰色土・淡黄色土少し混入 鉄分含む
 21. 淡黄色粘質土 粘り固 しどろ 硬 鉄分含む
 22. 褐色粘質土 粘り固 しどろ 硬 灰色土少し混入 鉄分含む
 23. 淡黄色粘質土 粘り固 しどろ 硬 鉄分含む
 24. 暗褐色粘質土 粘り普通 しどろ 硬 褐色土多く混入
 25. 暗褐色粘質土 粘り普通 しどろ 硬 灰色土・淡黄色土多く混入 鉄分含む
 26. 淡黄色粘質土 粘り普通 しどろ 硬 褐色土・淡黄色土少し混入
 27. 淡黄色粘質土 粘り固 しどろ 硬 褐色土多く混入
 28. 褐色粘質土 粘り固 しどろ 硬 褐色土少し混入
 29. 淡黄色粘質土 粘り固 しどろ 硬 灰色土・淡黄色土多く混入
 30. 淡黄色粘質土 粘り固 しどろ 硬 灰色土・淡黄色土多く混入
- 0 2m

第6表 溝・堀一覧表

遺構名	地区	方位	幅(m)	深さ(m)	底の傾斜	出土遺物	備考	押図No.
溝39	Z-C74-75	N25°E ～N3°E	2.0～2.1	1.0	平坦			第42図
溝40	Z-F72～74	N3°E	1.2～3.4	0.4～1.1	南方へ若干下降		溝41と重複、溝41に先行	第42図
溝41	Z-G72-73	N4°E	0.6～1.1	0.4～0.6	北方へ下降	越前焼埴鉢(19世紀)	溝40と重複	第42・43図
堀13	Z-F68～72	N28°E	1.0～3.5	0.9～1.1	南西へ若干下降			第43図
堀14	B-D52～59	N83°W	—	—	不明		畝状遺構と重複、石段状遺構を伴う	第51図

4 土坑・ピット

本項では当調査区の土坑・ピットのうち、多く検出された堅穴類を中心に取り上げ、その概要を記す。各遺構の詳細については一覧表（第7表）を参照されたい。

土坑62・63（第44図） 土坑62は隅丸長方形の堅穴である。建物13（ピット）および溝34に後行する。いわゆる建物の類の可能性が高いが、上部構造の存在を示す状況、例えば柱穴列など構造物の痕跡は堅穴内部や周辺では確認し得ない。土坑63は浅皿状の土坑である。

土坑64（第45図） 隅丸長方形の堅穴である。規模が小さく、内部のピットや周辺の遺構などにも、構造物の存在をうかがわせる状況は確認し得ない。

土坑101（第46図） 隅丸長方形の堅穴である。この種の堅穴としては大きい部類で、内部にもいくつかピットが検出されているが、周辺まで含めて柱穴配列などは見出せない。

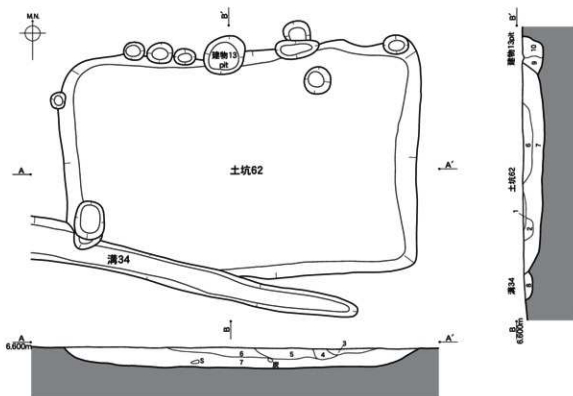
土坑110・111（第47図） 土坑110は浅皿状の土坑、土坑111は隅丸長方形の堅穴で、土坑111が土坑110に先行する。ともに規模が小さく、周辺にも構造物を伴う状況は確認し得ない。

土坑119（第48図） 楕円形に近い隅丸長方形の堅穴である。井戸25・26（第40・41図）に後行する。内部でピットを多く検出しているが、特に柱穴列などは見出せず、周辺にも構造物の存在を裏付ける状況は確認し得ない。

土坑120（第49図） 方形の土坑に半円形の張り出し部が付いたような、不整形の浅皿状土坑である。中央の溝は下層遺構（墳墓周溝）を掘削した痕跡である。なお、この遺構の位置する大きな堅穴は、後世（近～現代か）の擾乱である。

第7表 土坑一覧表（1）

遺構名	地区	平面形状	平面規模(m)	深さ(m)	出土遺物	備考	押図No.
土坑62	A70～71	方形	3.9×2.5	0.2		建物13に重複	第44図
土坑63	A-B69～70	歪円形	2.1×1.3	0.1			第44図
土坑64	B70～71	方形	2.6×1.9	0.1			第45図
土坑101	C63～64	方形	6.0×3.1	0.3	須恵器蓋		第47図
土坑110	F65	不明	(1.8)×?	0.1		土坑111に重複	第48図
土坑111	F65	方形	3.0×1.7	0.4		土坑110に重複・先行	第48図
土坑119	E-F70	方形	(5.5)×4.1	0.4		井戸25・26に重複・先行	第49図
土坑120	D-E69～70	不整形	5.3×5.3	0.5	古瀬戸瓦子・天目鍋		第50図

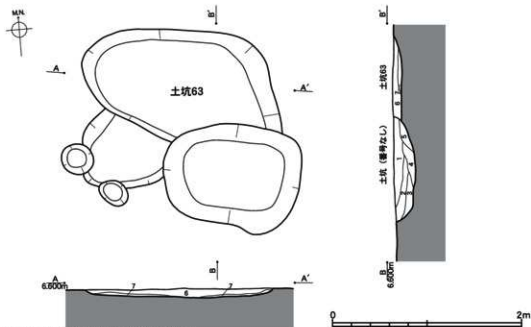


土坑62

1. 焼灰色粘質土 剖面図 上約強 ハード 焼灰灰色土多く、淡黄灰色土少し混入
2. 焼灰色粘質土 剖面図 上約中強 ハード 焼灰灰色土多く、淡黄灰色土少し混入 微分含む
3. 焼灰色粘質土 剖面図 上約中強 ハード 淡黄灰色土多く、焼灰灰色土少し混入 土層片含む
4. 焼灰色粘質土 剖面図 上約中強 ハード 淡黄灰色土多く、焼灰灰色土少し混入
5. 焼灰色粘質土 剖面図 上約強 ややハード 淡黄灰色土多く、淡灰土少し混入 土層片混入を含む
6. 焼灰色粘質土 剖面図 上約中強 ハード 淡黄灰色土多く混入 微分含む
7. 焼灰色粘質土 剖面図 上約中強 ハード 焼灰灰色土多く、淡黄灰色土少し混入

溝34

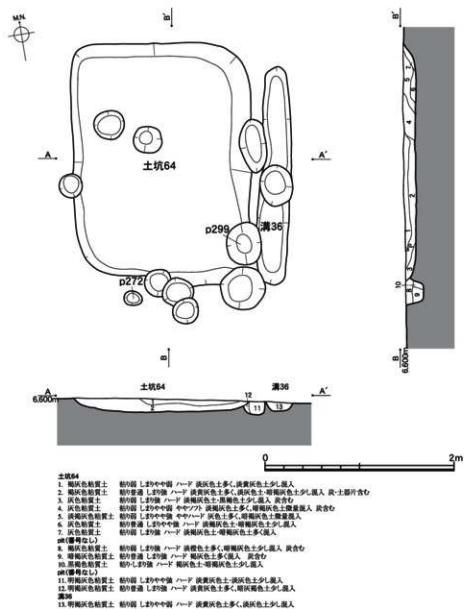
8. 暗褐色粘質土 剖面普通 上約中強 ハード 焼灰灰色土多く、淡灰土少し混入 建物13跡(なし)
9. 暗褐色粘質土 剖面図 上約中強 ややハード 淡灰土多く、灰色土少し混入
10. 灰褐色粘質土 剖面図 上約強 ハード 淡黄灰色土、暗褐色灰色土少し混入



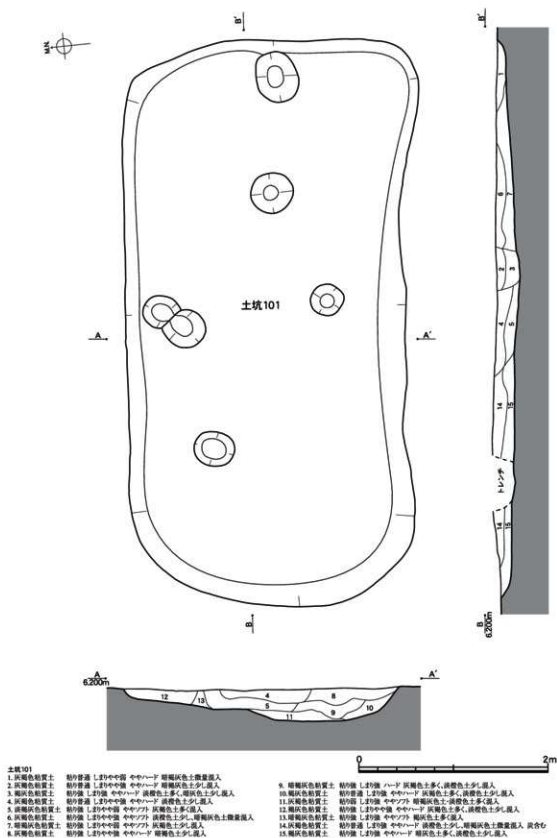
土坑(番号なし)

1. 淡黄灰色粘質土 剖面図 上約中強 ハード 淡灰土多く、淡黄灰色土少し混入 微分含む
2. 淡黄灰色粘質土 剖面図 上約中強 ハード 淡灰土多く、淡黄灰色土少し混入 微分含む
3. 淡黄灰色粘質土 剖面普通 上約強 ハード 淡黄灰色土多く、淡黄灰色土少し混入 微分含む
4. 淡黄灰色粘質土 剖面普通 上約強 非常にハード 淡黄灰色土多く、淡灰褐色土少し混入 微分含む
5. 焼灰色粘質土 剖面普通 上約強 ハード 淡黄灰色土多く混入
6. 焼灰色粘質土 剖面普通 上約強 ハード 淡灰土多く、暗褐色灰色土少し混入 微分含む
7. 暗褐色粘質土 剖面普通 上約強 ハード 焼灰灰色土多く混入 微分含む

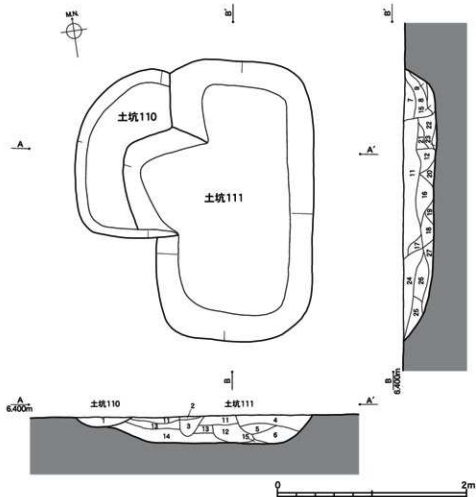
第44図 土坑62・63実測図 (縮尺1/40)



第45図 土坑64実測図 (縮尺1/40)



第46図 土坑101実測図 (縮尺1/40)



土坑110

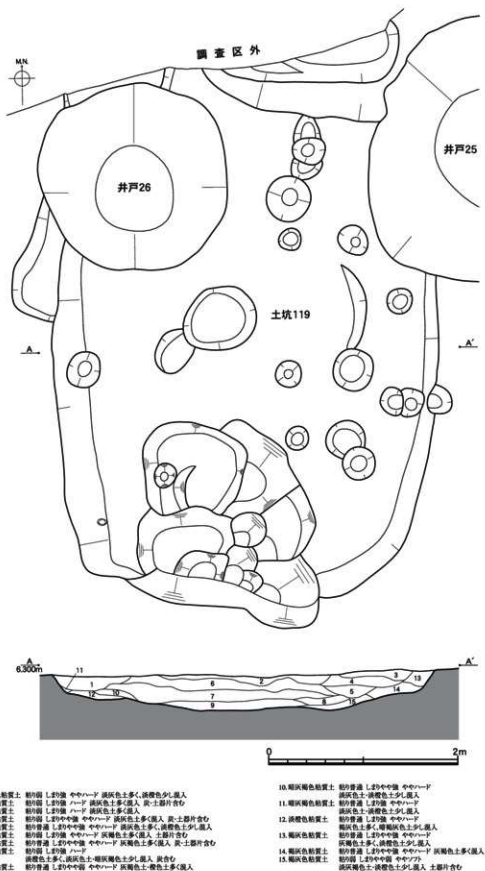
1. 褐色粘質土 粘り滑溜 しりり強 ややハード 淡褐色土少し混入

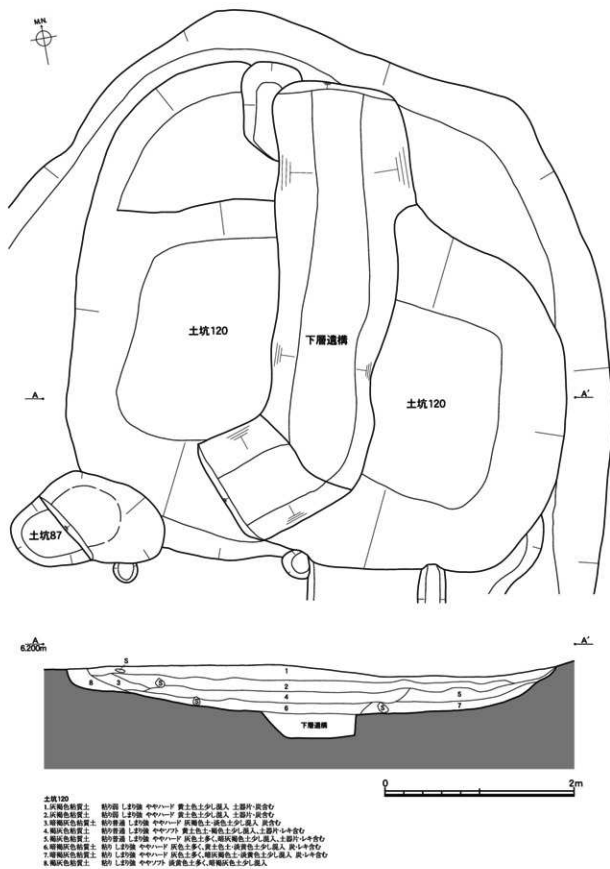
土坑111

2. 灰褐色粘質土 粘り滑溜 しりり強 ハード 淡褐色土少し混入
 3. 褐色粘質土 粘り強 しりり強 ややソフト 淡褐色土少し混入
 4. 暗褐色粘質土 粘り滑溜 しりりやや強 ハード 淡褐色土少し混入
 5. 灰褐色粘質土 粘り強 しりりやや強 ややソフト 淡褐色土少し混入
 6. 灰褐色粘質土 粘り強 しりりやや強 ややソフト 淡褐色土少し混入
 7. 暗褐色粘質土 粘り強 しりりやや強 ややハード 淡褐色土少し混入
 8. 暗褐色粘質土 粘り強 しりりやや強 ややソフト 淡褐色土少し混入
 9. 暗褐色粘質土 粘り強 しりりやや強 ハード 淡褐色土少し混入
 10. 灰褐色粘質土 粘り滑溜 しりりやや強 ややソフト 淡褐色土少し混入
 11. 暗褐色粘質土 粘り強 しりり強 ややハード 淡褐色土少し混入
 12. 暗褐色粘質土 粘り強 しりり強 ややハード 淡褐色土少し混入
 13. 暗褐色粘質土 粘り滑溜 しりり強 ややソフト 淡褐色土少し混入
 14. 暗褐色粘質土 粘り強 しりり強 ソフト 暗褐色土プロット 淡褐色土少し混入

15. 暗褐色粘質土 粘り強 しりりやや強 ソフト 淡褐色土少し混入
 16. 暗褐色粘質土 粘り滑溜 しりり強 ややハード 淡褐色土少し混入
 17. 暗褐色粘質土 粘り滑溜 しりり強 ハード 暗褐色土少し混入
 18. 暗褐色粘質土 粘り強 しりり強 ややハード 淡褐色土少し混入
 19. 暗褐色粘質土 粘り滑溜 しりり強 ややソフト 淡褐色土少し混入
 20. 暗褐色粘質土 粘り滑溜 しりりやや強 ハード 淡褐色土少し混入
 21. 暗褐色粘質土 粘り滑溜 しりりやや強 ややハード 淡褐色土少し混入
 22. 暗褐色粘質土 粘り強 しりり強 ややソフト 淡褐色土少し混入
 23. 暗褐色粘質土 粘り滑溜 しりり強 ソフト 暗褐色土少し混入
 24. 暗褐色粘質土 粘り強 しりり強 ハード 暗褐色土少し混入
 25. 暗褐色粘質土 粘り強 しりり強 ハード 暗褐色土少し混入
 26. 暗褐色粘質土 粘り滑溜 しりりやや強 ややハード 淡褐色土少し混入
 27. 暗褐色粘質土 粘り強 しりり強 ややソフト 暗褐色土少し混入

第47図 土坑110・111実測図(縮尺1/40)





第49図 土坑120実測図（縮尺1/40）

第3節 平成14～16年度調査区 [図版第13・14、第50～54図、第8表]

本調査区で検出した上層遺構は、堀1条、溝146条（畝状遺構を含む）、土坑27基、ピット152基（溝・土坑・ピットは遺物を出土したもののみ）をそれぞれ数える。本節ではこれらの遺構のうち代表的なものを抽出、これらに伴うと見られる遺構や複合的な遺構についてもあわせて記述する。

1 堀

堀14・石段状遺構（第11・50図）堀14は前調査区（平成12・13年度調査区）も含めて、F47区からZ69区までの調査区南縁で、堀の北側のみ検出した。当調査区では、まずC56～59区にかけて堀の北壁の一部を検出、遺構検出面から約1.8mの深度まで掘削・調査したが、底部の検出には至らなかった。続くC56区以西については、地表面との高低差がより急激に広がっていくことが予想されたため、これ以上の調査は危険と判断、安全対策として南縁から2～3m程度の幅で余地を取り、堀の上端のみを検出・掘削した。検出した軌跡から推定される堀の向きは、Z69～A64区付近まではほぼ東西方向（EW）を向くが、A64区以西からはやや北寄り（N83°W）に振れる。これは調査区の輪郭や周辺の地形状況と符合しており、自然堤防の周縁部で川と併行するように堀が開削された状況が推察される。

石段状遺構はC56区の堀14北岸で検出した。計4点の石が階段状に配されており、堀を昇降するために設置されたと見られる。最上段・最下段の状況から、当時の生活面が遺構検出面より50cmほど高いこと、堀の上端縁が当時の水際に近いことがそれぞれ推察される。下3段の石はいずれも五輪塔の部品を転用したもので、20～30cm前後の間隔と15～20cm前後の段差を置きながら、平坦面がほぼ水平になるように埋め込まれる。一方、最上段の石は下3点より一回り小さく、下段の石の端に架かる程度に置かれているところから、補助的な部品があるいは石段とは直接関連のない可能性もある。

2 溝

畝状遺構（第11・51図）当調査区では広範囲にわたって多数の溝を検出したが、そのほぼすべてが長さ1.0～4.0m、幅0.2～0.3m、深さ0.05～0.15m前後の小規模なものであった。図示したのはその一部であるが、これらの溝には並列に集まる傾向が顕著に見られ、特にG47区からE～F55区にかけての斜面に、20～30cm前後の間隔で多数密集している。以上の状況から判断して、当地には畑とその畝が広がっていたものと推測される。つまり、検出された溝は畝と畝との間のくぼみであり、厳密には溝と溝との間が本来の遺構、すなわち畝跡であったと考えられる。

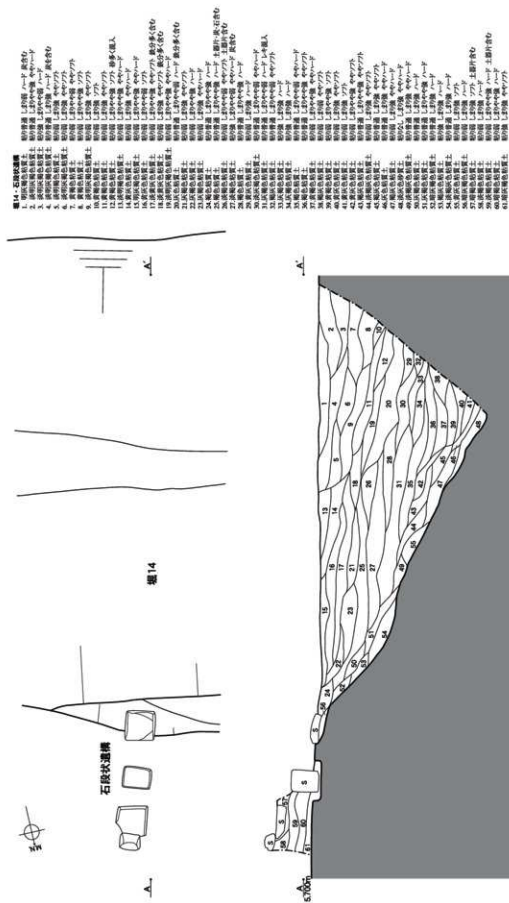
3 土坑・ピット

当調査区で検出した土坑・ピットのうち、本項では主な土坑を取り上げ、その概要を記す。なお、各遺構の詳細については一覧表（第8表）を参照されたい。

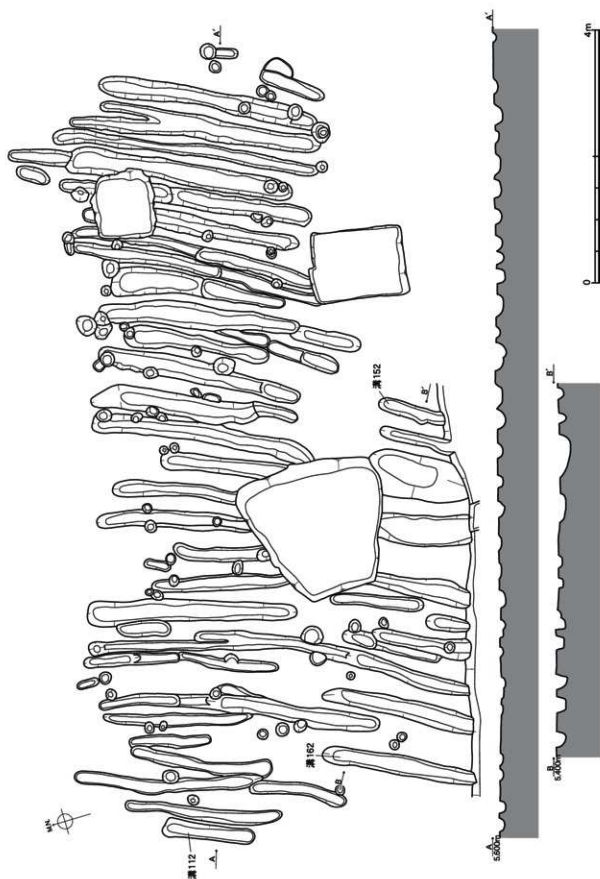
土坑126（第52図）調査区北縁で部分的に検出した。いわゆる堅穴と見られ、全体形状は不明だが、楕円形もしくは隅丸長方形と推測される。

土坑130～132（第53図）多くの土坑・ピットなどと互いに連結・密集した状態で検出した。当調査区は概して遺構密度が低く、このような遺構の連結・密集も、前述の畝状遺構のほかにはほとんど見ることができない。

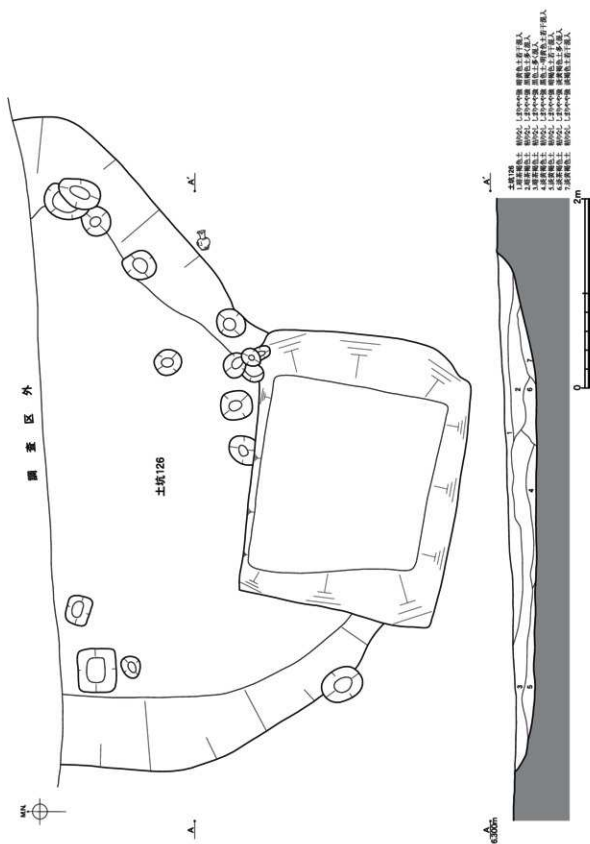
土坑133・134（第54図）土坑133は非常に深く、形状・規模とも井戸を想起させたが、覆土に粘土層や有機物層などが確認されず、湧水も見られないなど、井戸と認定する材料に欠けたため、土坑と判断した。土坑134は隅丸方形の土坑で、方形の掘り方を持つ柱穴にも似るが、周辺に同様の土坑は見当たらず、柱穴列や掘立柱建物形成する状況も確認し得なかった。



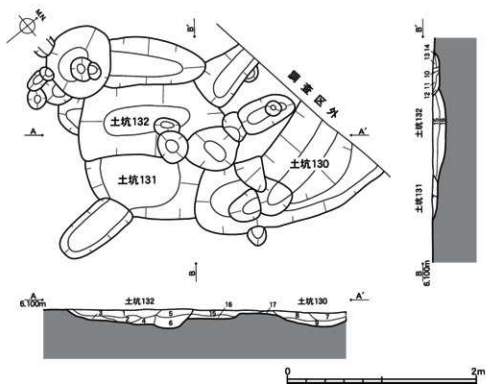
第50图 堀14・石段状遺構実測図 (縮尺1/40)



第51図 欽状遺構尖頭図 (縮尺1/60)



第52図 土坑126実測図 (縮尺1/40)



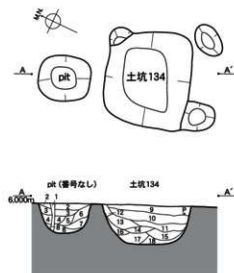
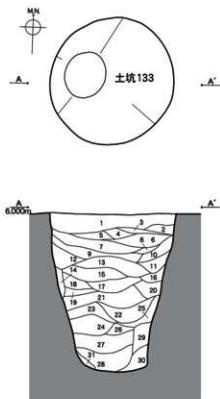
土坑130～132

1. 褐色灰色粘質土 粘り強 しまり強 ややツツ 褐色灰色土多し混入。土器片含む
2. 褐色灰色粘質土 粘り普通 しまり中強 ややハード 褐色灰色土、暗褐色土少し混入
3. 暗褐色粘質土 粘り強 しまり強 ややツツ 褐色灰色土少し混入。暗褐色土多し混入
4. 暗褐色粘質土 粘り普通 しまり中強 ややツツ 褐色灰色土、暗褐色土少し混入
5. 暗褐色粘質土 粘り普通 しまり中強 ハード 褐色灰色土多し混入
6. 褐色灰色粘質土 粘り強 しまり中強 ややハード 褐色灰色土少し混入
7. 褐色灰色粘質土 粘り強 しまり強 ややツツ 褐色灰色土少し混入
8. 暗褐色粘質土 粘り強 しまり中強 ややハード 褐色灰色土多し混入
9. 暗褐色粘質土 粘り普通 しまり強 ややハード 褐色灰色土少し混入。土器片含む
10. 暗褐色粘質土 粘り強 しまり中強 ハード 褐色灰色土多し混入
11. 暗褐色粘質土 粘り普通 しまり中強 ややハード 褐色灰色土、暗褐色土少し混入
12. 暗褐色粘質土 粘り強 しまり中強 ややハード 褐色灰色土多し混入。暗褐色土少し混入
13. 暗褐色粘質土 粘り普通 しまり強 ハード 褐色灰色土多し混入。灰含む
14. 暗褐色粘質土 粘り強 しまり中強 ややハード 褐色灰色土少し混入
15. 褐色灰色粘質土 粘り普通 しまり強 ややハード 褐色灰色土多し混入
16. 暗褐色粘質土 粘り強 しまり強 ハード 暗褐色灰色土少し混入。土器片含む
17. 暗褐色粘質土 粘り強 しまり中強 ややハード 褐色灰色土少し混入。暗褐色土多し混入
18. 暗褐色粘質土 粘り強 しまり中強 ハード 褐色灰色土、暗褐色土少し混入。灰含む

第53図 土坑130～132実測図（縮尺1/40）

第8表 土坑一覧表（2）

遺構名	地区	平面形状	平面規模(m)	深さ(m)	出土遺物	備考	挿図No.
土坑126	G・H60～61	不明	(7.1)	0.3			第52図
土坑130	H58	不整形	(1.7)	0.1		土坑131、132と重複。土坑132に先行	第53図
土坑131	H58	不整形	1.2×0.7	0.06		土坑130、132と重複	第53図
土坑132	H58	不整形	1.5×0.8	0.2		土坑130、131と重複	第53図
土坑133	E59	円形	1.4(直径)	1.7		井戸か	第54図
土坑134	E58	歪方形	1.0×0.9	0.4			第54図



第54図 土坑133・134実測図(縮尺1/40)